



モンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』  
所収富士山図



ケンペル『日本史』所収富士山図

### 西洋人によって描かれた富士山の初期の図版

歴代オランダ商館長は毎年の江戸参府の道中で富士山を見る機会に恵まれていた。商館長日記に、東海道沿いの宿場の名称のみを記録する商館長もいれば、富士山への賞賛を綴っている商館長もいた。しかし、西洋人の手による富士山の絵は17世紀中にあまり見られない。管見の限り、最初に富士山の絵を掲載した外書は1669年に刊行されたモンターヌスの『東インド会社遣日使節紀行』である。しかし、モンターヌスの図版における富士山の表象は周囲の山より大きく描かれたものに留まっている。日本で定型化されていた三峰型で描かれる富士山図が西洋に最初に紹介されたのはケンペルの『日本史』（1727年刊）を通じてである。ケンペルの日記によると、彼が富士山を初めて見たのは、1691年3月7日に白須賀宿を通過した時だった。「当地で私たちは富士山、別名フジノヤマの山頂を初めて見た。その美しさは比類なきものであるかもしれない」と綴っている。

両書とも日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）



# 日文研

## —エッセイ—

細川周平 ジャズる辞書―モダン昭和の流行語

楊 春華 学問を見つめる視線―研究の経験をどのように生かすのか―

根川幸男 船旅と海賊とモダンガール―北村兼子の台湾・広東紀行

木場貴俊 時代劇の愉しみ方

光平有希 「宗田文庫」と出会って

関野 樹 データベースからデータへ

堀井佳代子 上司としての藤原実資

久米舞子 もういちど、動物園の世界へ

呉座勇一 史料を読むということ

## —センター通信—

稲賀繁美 「日本の風」国際シンポジウムに参加して―「大衆文化研究」の余白に

楊 際開 「近代中国革命の思想的起源―日本からの建国思想の受容を中心に」

第一回共同研究会の感想

牛村 圭 基礎領域研究「英文日本歴史研究書講読」を開講・担当して

瀧井一博 第五三回国際研究集会「世界史のなかの明治／世界史にとっての明治」を実施して

磯前順一 汪暉氏と歩く被災地・被差別部落―新しい主体性の形成に向けて

2 8 13 20 27 34 38 42 48 52 58 62 67 72

エッセイ

## ジャズる辞書―モダン昭和の流行語

細川 周平

私は長く日本のジャズ史を追いかけて、昨今は戦前に集中している。わかったのは昭和初頭のモダン時代、ジャズの語は音楽に限定されず、流行する物事や価値観、時代の気分を指していたことだ。そのためアメリカではジャズ・エイジと呼ばれ、日本にも伝えられた。モダンボーイ、モダンガール、カフェー、シネマに代表されるアメリカ風俗が流行し、ジャズは時代の輝きを象徴する存在、かつ言葉だった。大空社の「近代用語の辞典集成」シリーズのうちの関東大震災後発行の二九巻を手に取ると、ジャズの項目を含むのは二〇巻で、かなりの人気語であったことが分かる。

まず標準的な記述を出発点としよう。「ジャズ、バンド (jazz band 英) アメリカ黒人の騒がしい音楽隊、淫猥で、野卑で騒がしい」(『近代新用語辞典』修教社書院、一九二八年)。解剖すると(一)ジャズ・バンド(用語)、(二)アメリカ黒人(起源)、(三)騒がしさ(音響、音質)、(四)音楽隊(芸術性)、(五)淫猥、野卑(低俗性)。それぞれについて他の辞典を読み合わせ、同時代独特の意味を探してみたい。

(一) 用語。ジャズではなく「ジャズ・バンド」を項目に立てているのに目が向く。概念として演奏者、演奏形態がジャンルに先行している。ジャズとバンドは分かちがたい。またジャズの語源として、アフリカ土俗語の「出来るだけ速く」からきたという説（これはスピードの比喩としてのジャズと関わる）、アフリカ人の踊りの時の口癖に由来するという説、ヴィクスベリーのチャールズという太鼓手のあだ名から来たという説を複数の辞書が挙げている（『モダン辞典』弘津堂書房、一九三〇年など）。和製英語である「ジャズソング」の項を英語併記で立て「ジャズ音楽の中に入る歌。卑俗なものが大部分。転じて一般に俗っぽい歌をいう」（『最新百科社会語辞典』改造社、一九三二年）と、もともとらしく解説しているのが可笑しい。

(二) 起源。アメリカ黒人やアフリカ奴隷の寄与を明記した辞書とそうでない辞書がある。「元阿弗利加黒人間に発生した舞樂が一六一九年和蘭商船の輸送せる十四人の黒人奴隷と共に米國に渡り近年ホワイトマン氏によつて完成されたもの」（『新聞語辞典』栗田書店、一九三三年）。このポール・ホワイトマンはジャズ王と呼ばれた白人のバンドリーダーで、大人氣を得ていた。このようにアフリカの野蠻を白人が芸術化したという説は、ホワイトマン自身の著作『ジャズ』（一九二九年に邦訳）ほかあちこちで読める。珍しい記載として「インディアン」の土俗音楽に端を発した音楽」と記した辞書がある（『新文芸辞典』誠文堂、一九三二年）。「素とアメリカに於ける黒奴（ニグロ）とか布哇土人などの未開な音楽を真似たもの」という記述もあり（『現代新語辞典』大日本雄弁会講談社、一九三〇年）、合衆國領土の（未開）すべてをジャズは引き受けたようだ。「アメリカで発生した寄席向きの音楽」と大衆性を明記した『最新百科社会語辞典』は「昔の名作を勝手に編曲したものや、民謡をとったものや、舞曲をとつ

たものや種々ある」と曲目の実情をきっちり述べ、他の辞書に多い文明論的調子を落としている。

(三) 音響。騒がしさは多くの辞書で言及され、ジャズ概念の中心にあった。「ブー・ブー・ガチャガチャの騒騒しい賑やかさのこと、又は、大都会の喧騒のことにもいう」(『新しい時代語の字引』実業之日本社、一九二八年)。騒がしさはここでいう音響的な意味にとどまらず、不調和、粗野の意もあり(『常用モダン語辞典』好文閣、一九三三年)、日常語ではむしろこちらの意味で応用された。たとえば「極めて騒々しくて落着かない雑音」の隠語となって「台所のジャズ」「街頭のジャズ」という使われ方もあったという(『モダン語漫画辞典』洛陽書院、一九三一年、『現代新語辞典』大日本雄弁会講談社、一九三〇年)。つまり喧騒、多忙の洒落た言い替えでもあった。この延長で女学生は「よくがやがやと喋舌るやかましい人」を「ジャズさん」と呼んだそうだ(『モダン新用語辞典』教文堂、一九三一年)。

語源はジャズという不愉快な音だが、「今ではジャズにも相当音楽的なものも出てくる」と雑音が「音楽」に文明化したという認識もある(『常用モダン語辞典』好文閣、一九三三年)。別の辞書では動物の鳴き声を出す笛、チャールストン・マシン(?)をジャズ固有の楽器としている(『モダン新用語辞典』教文社、一九三一年)。楽器未満の雑音の道具なのだろう。同じ辞書はハワイアン・ギターやウクレレも加え、フラ音楽もジャズに加えている。当時ジャズがいかに幅広い音楽や流行を抱きかかえていたかを知る。

(四) 芸術性。音楽性を否定する未開主義が主流だが、音楽としてしっかり扱った辞書もわずかにある。「(ジャズは)リズムの縮小されたフォックス・トロットを切分法化したものである。切分法によって順調なメロディが、結滞させられ、不順にさせられる」(前掲『モダン辞

典』。切分法（シンコペーション）の語を理解した読者は少数だったろうが、もっともらしく聞こえるだけで辞典の最低限の機能は果たしている。リズムの強さはジャズの命で「切分法という丁度順調な血液の運動に結滞させたり急進させたりする如く刺激的形式を以って新しい楽器により現代を慰めるもの」（『モダン語辞典』誠文堂、一九三二年）とも呼ばれている。切分法を血流を刺激する過剰な生理活動に直結している。この辞典はすぐあとに血の概念と切り離せない人種の概念を切り出している。ジャズの起源は不明と匙を投げたうえで、「ニグロの黒ん坊からわいて出たことはたしからしい」。黒人即ち未開人種という明治以来のステレオタイプに乗って、ジャズのアフリカ起源は語られた。

『プロレタリア文芸辞典』（白揚社、一九三〇年）の「ジャズ・バンド」の項（「ジャズ」の項はない）は参照した辞書群のなかで異彩を放つ。まずそれは「黒人の民衆音楽の曲調と、アメリカ都市生活の欲求によって集团的に作りだされたもの」と定義されている。「集団」的制作用はプロレタリア思想に適った発想で、黒人の寄与を大きく評価している。かなりイデオロギー的な扱いである。ジャズ・バンドは「音符がなくて、ただ簡単なおぼえ書のようなものがあるだけで、いわば即興の音楽で、その指揮は、大太鼓と、コントル・ファゴットが指定するところのリズムの秩序でやる」。今でこそ即興性はジャズ音楽の最大の特徴と考えられているが、参照した辞書群でそれを明確化したのは少ない。ジャズ・バンドには「古い音楽の持っている均衡のとれた調和とか、構成などは少しもないかわりに、内面的で、而かも力強い表現が味える」。ヨーロッパ由来のクラシック（つまりブルジョア音楽）にないたくましさや備えた新しい音楽として肯定している。しかしそれは同時に工場を所有する側「ブルジョアの音楽」にもなり果てる可能性を持っている。白人連中が理想のプロレタリア音楽を奪い取ったと

いう趣旨である。何かの抄訳と思えるが、大震災後の左翼的風潮がジャズ解釈にも届いた。

(五) 低俗性。ジャズはデカダン、猟奇、奇妙な刺激、粗野、誘惑、変態などと結びつき、道徳、品位に欠くと見なされた。こうした文言はどこからでも拾える。ダンスのステップから軽快さが連想され、意味の重みを外したナンセンスがパートナーとなった。「ジャズは」軽快とナンセンスが特徴、これは正調なリズムに何等の刺激を感じなくなった近代人の猟奇的な気分を満足させる為に自づと生れたもので原始的な匂いと近代的な匂いとをカクテルとした様なもので、軽快で華かな為か近代人の本能満足の伴奏曲として愛好される」(『これ一つで何でも分る現代新語集成』博隆社、一九三一年)。軽快、ナンセンス、猟奇が「正調」の対極に置かれている。近代人はことごとく「機械の音響に疲れ」、正調から逸脱した部分をジャズの刺激で愛撫される必要がある。大流行した「東京行進曲」(一九二九年)の歌詞「ジャズで踊ってリキールで更けて」を「正に現代相」と結論している。別の流行語と結託して意味を失らせた例として「ジャズとは」即興的な切分法の形式と原始的・ウービー的・哀愁的旋律を特徴とする」と述べる辞典があり、今度は「ウービー」を引くと「歓喜の姿、不景気知らず」とあり、何かわからないが「朗らかに微笑ましい映画、演劇、ダンス、ジャズ、痛飲、猥談等々皆ウービーである」(『新聞語辞典』栗田書店、一九三三年)。この言葉は「ウービー・ガール」という流行歌もあるように、ナンセンスすべてにあてはまる万能のはやり言葉だった。

「ジャズ」とは別に動詞形「ジャズる」を立てた辞書によると、「ジャズる ジャズめいただらしない、しかも騒々しい生活を送る事、又ジャズに合せてダンスを踊る事」(前掲『モダン辞典』)。ダンスよりも生活がまずジャズの本体というのが、ジャズ・エイジと呼ばれるにふさわしい。「ジャズの如く、ジャズに浮れて、ふらふらする、与太を飛ばす、騒々しくやつ



ちゃう、生活する、何でもかまわない出鱈目に踊る具合に暮しちゃう」(前掲『モダン語辞典』)。このゆるゆるの文体がすでにジャズっていると思える。

新語辞典の読み合わせから、数年間にジャズなる語の意味が爆発するのを確かめてきた。流行語として勝手な意味をふりまくこと自体が、ジャズ・エイジらしい。ジャズ・エイジの終焉はこの看板語の洪水の終焉を指す。満州事変後には浮かれにくくなり、ジャズは概してダンスやアメリカ音楽の文脈に限定されて使われるようになった。外来の流行音楽は次から次へと現れたが、これほど流行語となり、意味の幅を持った用語はないだろう。さて、周りで「ジャズさん」を探してみましよう。ジャズってみましよう。今と違う九〇年前の「ジャズ」を感じるために。

(国際日本文化研究センター教授)

## 学問を見つめる視線―研究の経験をどのように生かすのか―

楊 春 華

### 一、誤解からもたらされた思考

国際日本文化研究センター（以下、「日文研」と称する）では、月に一度、ランチ・ミーティングが行われている。これは、新しく就任した先生の歓迎会と、また任期を終了した先生の送別会を兼ねていて、日文研にとって重要な行事である。ランチ・ミーティングは、我々外国人研究員にとって、所内の先生方および来訪研究者との大切な交流の場であり、互いの研究をより知るよい機会でもある。

国際交流が盛んな日文研では、外国人研究者が多く見られる。考えてみると、私は二〇一八年四月に日文研に来てから、ほとんどの外国人研究者とこのランチ・ミーティングで初めて知り合ったのである。そのために、毎月のランチ・ミーティングはわれわれにとって、新しい研究者との出会いの貴重な機会であり、毎回欠かさず出席している。二〇一八年度についていえば、六月に就任した研究者がとりわけ多かった。同月六日に行われたランチ・ミーティングでは、その月に赴任された先生方がそれぞれ自分の研究などについて自己紹介をしてくださった。その際、私は新しく就任した先生方の立派な研究内容に集中するあまり、それら先生方の名前がはつきり聞こえなかった。日文研に来られる外国人研究者は、日本を研究対象としているため、日本語ができることは、驚くべきことではないともいえる。にもかかわらず、彼ら・

彼女ら外国人研究者の日本語の堪能さには、感心することが多い。そしてその月のランチ・ミーティングでは、ある一人の「外国人」研究者があまりにも流暢な日本語で自分の研究内容を紹介しているのに驚いて、思わず私は「日本語が上手ね」と隣にいる先生に話した。

ランチ・ミーティングの翌朝、日文研の研究室へ行く途中、昨日日本語が非常に上手だった「外国人」の先生に会ったのだが、その方とお互いの研究内容を話していたときであった。この先生の日本語能力に再び感心し、「先生の日本語は非常に上手です」と伝えた。その「外国人」の先生は、ニコニコしながら「私は日本人ですよ」と答えた。大変失礼なことをしたと実感した。なぜ最初に「外国人」だと思ってしまったのか。その後、真剣に考えた。それまでのランチ・ミーティングで出会った研究員は外国人が多かったため、このように思い込んでしまったことが要因である。

普段の経験から生じたこの誤解があった後、以前の自分の経験（研究も含め）は、どこまで通用するのかと考えさせられた。すなわち、研究の時間が長くなるにつれて、習慣的な思考や認識は、ものを見る目を鈍らせる恐れがあるのではないかと考えるようになったのである。

## 二、研究対象の真髓を見出す思考力

研究を通して得られた経験は、次の研究にどのように結び付けることができるのだろうか。この問題に関する思考のきっかけは、日文研の井上章一教授の『京都ざらい』（朝日新聞出版、二〇一五年）を読んだ時のことであった。洛中の人々はどうのように洛外（著者の出身）から来た人のことを見ているのか、著者自身の観察、また身をもって感じたことを描写し、このような見方を引き起こす要因を研究者の視点から深く探っていたのである。みんなが見ているこ

と、またみんなが知っていること、当たり前に見えるものを掘り下げるのは、きわめて難しいことである。井上教授の話によれば、「他人に見ぬけぬ何かを、私がつきとめたというわけでは、けっしてない。誰でもうすうす気づいていたが、あえて書くこうとはしなかった。そういうところに、私の文章は光をあてている。良く言えば、度胸がある、悪く言えば、世間の黙約に気づかない、無神経な書き手であったということか。」（同書、五十六頁）。謙虚な著者はこのように述べているが、その黙約をあえて破って、その内容を人々が納得できる形で明らかにしている、私は思う。

人と異なるものを書くなら、他人より鋭い判断力が必要である。そしてその判断力は、研究者の長年の研究活動の中で培った経験、また研究者の生活体験とも関わっているのである。研究者であれば、過去の研究の継続によって作り上げた枠組みから将来の研究に結びつく研究の構想を立て、また個人の生活体験に新たな社会での体験を加えて判断するといったことの重要性は、誰しも認めるものだが、それを実際に実行するのは、決して容易なことではない。その中であって井上教授は、一つの手本である。

見慣れているところから、そこに隠されているさやかな問題点をも見落とさず、真実を追究していくためには、鋭い判断力を鍛えなければならない。井上章一教授の『京都ざらい』を読み、一層この思いを強くした。

### 三、研究者の共有の研究経験の活用

二〇一八年五月二〇日から二一日の二日間は、日文研創立三〇周年の記念国際シンポジウム「世界の中の日本研究」が開催された。このシンポジウムは、歴史、古典・言語、舞台芸術、

近現代文学および政治・思想という五つのセクションからなっていた。各国から集まってきた研究者は、それぞれのテーマをめぐって、研究発表をしていた。発表内容は、五つの大きな研究領域に分けられていたが、それぞれに共通したテーマとしては、日本研究というキーワードがあった。社会学の視点からみれば、研究者の研究領域は異なるわけだが、発表した内容、また研究方法などにおいては、何らかの形で社会学と関わっているように思われた。私は、このシンポジウムが、研究領域を超えた研究者たちの集いであると思い、二日間の研究者たちの発表から、研究に関する多くの示唆を得られた。

日本研究というキーワードのもとに、それぞれの研究領域において、それぞれの研究経験から立派な研究成果が発表されたことは、日本研究が広範囲で、かつ高い水準で進んでいることを表わしている。研究領域が異なるにもかかわらず、学問に対する解釈にはじまり学問の対象を見つめる視点に至るまで、私にとって収穫が多かった。研究者の共有の研究経験は、一つの研究ネットワークによって繋がっている。このネットワーク作りこそが、研究という経験に魅力を与えるのである。

研究において、研究者個人が研究を通じて得られた経験の限界をいかに突破できるのか。研究者が研究会やシンポジウムといった研究を共有する場に参加することは、そうした限界を外の世界へと押し広げてくれる、一つの有効な方法であると思われる。研究のネットワークの形成、研究領域を超えるチームの形成の必要性、さらに国際的な連携による研究は、非常に重要である。

多くの立派な研究者が集まる日本国際文化研究センターでは、頻繁に行われる研究会が重要な学習の場になると思う。研究会への自由参加の伝統、また研究会での自由な議論の雰囲気な

どを通して、より視野を広げ、より認識を深め、今まで見慣れてきた自分の研究に対する思考をさらに深めることができた。他の多様な背景をもつ他者と共有することを、どのように生かすのか、学問の対象を見つめる能力を鍛えることは、一生の仕事だと思われる。

（南開大学周恩来政府管理学院准教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）

## 船旅と海賊とモダンガール―北村兼子の台湾・広東紀行

根 川 幸 男

押し出される気分で年末の東京を離れ、吸ひつけられる気分で基隆へ上つたが、ざわついてゐる内地からのんびりとした南國の情緒を味ふだけでも私の胸は踊る。(…)／基隆は雨、呂宋から長駆して全島を荒しまわつた低気圧が、今私たちの上に渦巻いてゐる。

一九三〇年一月、二六歳の北村兼子は、台湾・基隆に上陸した感興をこのように記した。大坂朝日新聞の記者として活躍し、前年ベルリンで開かれた万国婦人参政権運動に日本代表として出席。本を書けばたちまちベストセラー、断髪に洋装で颯爽としたその姿は時代を魅了した。彼女は翌年急逝するが、その若い晩年、台湾の土を二度踏んだ。冒頭の文章は、大阪商船の広報誌『海』一九三〇年七月号に発表された「基隆」の一節である。

『海』は、一九二四年七月に創刊され、一九四三年八月に終刊となるまで一四四冊が発行された。昨二〇一八年、日文研が所蔵する『海』をベースに全冊の復刻出版を行い、監修・解説を担当したが、書ききれないことがいくつもあった。同誌には多くの作家・芸術家たちが寄稿したが、北村兼子はそのもっとも早い一人である。本稿では、『海』創刊の背景とともに、それが単なる一企業の広報誌から文芸誌の性格を持つに至る転機となった、兼子の台湾・広東紀行について記しておきたい。

## 一 大阪商船と『海』創刊の背景

関東大震災は大きな衝撃と損害をもたらしたが、阪神に拠点を置く大阪商船にとっては大きなビジネスチャンスであった。第一次世界大戦後低迷していた海運業界が、震災直後から人員・物資輸送に活躍。翌一九二四年に南米への移民送出が国策化し、南米・世界一周航路が開設された。

一九二五年には、關<sup>せき</sup>一大阪市長のもと、市域を拡張し東京を抜いて人口二一万人の日本最大の都市「大大阪」が出現。それは、近代建築や公園などの都市計画、カフェや映画館、並木を闊歩するモボ・モガなど消費文化に支えられたモダニズム空間を生み出す。郊外住宅地に住み、洋装を身につけ街を闊歩し、野球やテニスのようなスポーツを楽しみ、カフェで時間をつぶし、船に乗って異郷・異国へ旅する。震災後に新しく生まれた生活様式は、水辺や船と親和性が高く、海に向かって開かれていたといえる。

こうした時代に新しいメディアとして『海』が登場し、兼子のような新しいメディアにふさわしい新しい女性の書き手が出現した。

## 二 大大阪のモダンガール

北村兼子は、一九〇三（明治三六）年一月二六日、大阪北区天満に生れた<sup>三</sup>。父は漢学者の北村佳逸。祖父は京都亀岡の儒学者・北村龍象という学者一家で、長女であった彼女は幼少より漢学教育を受けた。一九二〇年、梅田高等女学校（現・大阪府立大手前高等学校）を卒業。大阪外国語学校別科英語科（現・大阪大学外国語学部）を経て、二二歳の時に初の女子学生として関西大学法学部法学科に入學。大学二年の時、大阪朝日新聞社の雑誌『婦人』に発表した



論文が注目されるや、同紙の社会部記者に採用された。『週刊朝日』『婦人』『グラフ』などに記事を発表。わずか一年ほどで花形記者となったが、「スキャンダル」がもとで同社を退職しフリーランスとなる。英語・ドイツ語に堪能だった兼子は、一九二八年にハワイ・ホノルルで開催された汎太平洋婦人会議に出席。また、翌一九二九年にベルリンの万国婦人参政権大会に日本代表として出席し、ドイツ語で演説して出席者たちの喝采を得た。

兼子は、『海』に少なくとも三編の記事を寄稿している。前掲の「基隆」、「砂湯」（一九三〇年一〇月号）、「廣東丸」（一九三一年一〇月号）である。これらのうち「基隆」と「廣東丸」から、兼子の旅の足取りをたどってみよう。

一九三〇年一月、兼子は「婦人文化講演会」講師の一人として台湾を訪れた。先の引用に続くのは次のような記述である。

ジャンク船の三原色が古代味を帯びて波間に浮動する。／細い糸のやうな銀線が、山の緑に煙つて夏山煙雨の一巻を展げる。／築山のやうに青淡色の海からつき出てゐる。私はちほ久しぶりで陸の緑をみた（『海』一九三〇年七月号）。

水上を進むジャンクを美しいと思いつつ、「人間は陸上動物だ」としみじみ感じる。彼女が乗船した船は九六五総トンの大和丸。近海郵船がイタリアから購入した中古客船である。「船が動揺して胃袋が緊縮する」と、やはり船酔いに苦しんだらしい。それでも彼女は船中五〇枚の原稿を書き上げたという。「人間は陸上動物だ」というのはその上での感興である。

基降——私は横一文字の身体を、縦一文字にした。／基降と聞いて、現金な元氣が出る。／基降水望——太平洋航路でホノル、をみつけた旅人は、オアシスで陸の緑に吸ひつけられる。／それと同じやうな考へが、いま私に來た。／人間は陸上動物だ。／私はしみ／＼と思った。水の上、波の間、幾日かして緑をみるよろこびは、恐らく筆や口では出ぬ境地（同）。

「横一文字の身体を、縦一文字にし」、洋上で得た身体感覚で、陸上を見つめなおす。それを「筆や口では出ぬ境地」と感嘆する。

上陸後、鉄道で台北へ向かった兼子は、広野に悠然と立つ水牛を見つめる。

この哲人は何を教へてくれるか。／汝らモガは頭だけが近代科学に発達してゐるが、浅薄な学説の笛でダンスを踊つてゐるのだ。落ちつけ！落ちつけ、汝の脚をして確と地の上に立たしめよと（同）。

車窓からみた水牛との会話に託し、得意の政治問題を持ち出すものの、兼子の足元はまだふらついている。

### 三 海賊とモダンガール

次に「廣東丸」である。

汽車にゆられて廣東丸の横腹まで／台湾の山から涼しい翠風を送ってくれる。／台湾の人から親切な別れの言葉を贈ってくれる／ドラが鳴った／港を離れる（『海』一九三一年一〇月号）。

一九三一年四月、兼子はふたたび台湾の土を踏む。「廣東丸」は、台湾をめぐった彼女が基隆から厦門へ船出する場面からはじまる。大阪商船の基隆香港線で、この航路に就航していたのが廣東丸であった。廣東丸は、一九二八年に浦賀ドックで建造された貨客船。二八八〇総トンながら、当時竣工したばかりである。兼子が「日本船はただ商船会社だけしか、このラインには就航してゐない」と記すように、台湾から仙頭、厦門を経て香港に至るルートは大阪商船が独占していた。いや、「海賊」すなわちこの海域の真の主が出没するような場所に、大阪商船がひとり乗り入れていたという方が正確かもしれない。

浪が少し出だした。／海賊の話も少し出だした。／食卓の山本氏が妙な顔をしだした。  
／そして「私は金塊をもってますから」といって、海賊の話をきいて最初は笑ってゐた山本氏が、だんだん妙な顔になって行った（同）

厦門を出航した夜、船内で海賊の話で賑わい、金塊を持ち込んで乗船している台湾総督府通信部の山本徹氏の顔色がみるみるかわっていく。描写にはユーモアが感じられ、「荷物などに執着がない」という「私」は船長の話を面白がって聞くのだった。そして、いよいよ海賊の出没するという海域を通過する夜――

海賊は投下資本―すなはち船舶切符によって、船客となって船中に入りこむ。／一等客の方がこはいといふ。(…)／夕餐には、汕頭から乗った新らしいお客さま数名が、食堂に出る。山本氏は顔色青白くなって、海賊かも知れないな眼つきをして彼らたちをみる。／彼等は中山服をきてゐるだけに、日本人でないこと明らかである。それだけに山本氏は不安とみえる。／私が面白がつて―山本さんは金塊をもっていらいっしやるんだから。と大きい声でいふと―金塊は梅へすててしまひましたよ。／と実に真面目ないひかた(同)。

海賊という非日常的な話題が、船旅にエキゾチズムと小さな緊張感をそえている。<sup>(四)</sup>

海賊の海域を脱した後、兼子は「香港へ着いたら十時の春洋丸に乗って上海へ向かいます」と高らかに宣言する。海賊顔負けの自由奔放なモガぶりだが、「船長始め機関長まで一生懸命に合はさうと努めてくださった」と、船のクルーは可愛い女性にはとことん甘い。

春洋丸は兼子がハワイへの往復に親しんだ船である。ところが、香港に入ると、春洋丸の影もかたちもなく、すでに出航してしまっていた。颯爽としたモガを演ずるはずが、置いてけぼりを経てボカンとしてゐる…そんなシーンが想像される。「基隆」の「汝らモガは頭だけが近代科学に発達してゐるが、浅薄な学説の笛でダンスを踊つてゐるのだ。落ちつけ！」と呼ぶ可愛らしく洒落たオチになっている。

女性と船(Ⅱ女性)は相性が悪いのか、春洋丸は東洋汽船が建造した豪華貨客船「天洋丸級」三姉妹の末娘。今を時めくモガは、引退前の老嬢に肘鉄を食わされた形になった。春洋丸に袖にされた兼子はこの後、北へ向かつて中国大陸を縦断する。

ただ、この記事が『海』に掲載された一九三一年八月、兼子はすでにこの世にはない。ヨーロッパ訪問で航空時代の到来を予想した彼女は、パイロットの操縦免許を取得。出発直前の一九三一年七月二六日に腹膜炎で急逝する。「廣東丸」が掲載された『海』が出る前に、彼女はあの世へ旅立ったのである。

## 註

(一) 北村兼子の経歴については、大谷渡『北村兼子―炎のジャーナリスト』（東方出版、一九九九）に拠る。

(二) この「スキャンダル」について、井上章一は「男性を翻弄する」ふるまいは、まだ時代にさがけすぎていた」と分析している（解説『ジャーナリズムと性』『近代日本のセクシュアリティ』19 風俗からみるセクシュアリティ』ゆまに書房、七頁）。

(三) 長澤文雄「なつかしい日本の汽船」[http://jpnships.cdgdc.jp/company/jpn\\_builder\\_048-2.htm#cantomaru\\_1625](http://jpnships.cdgdc.jp/company/jpn_builder_048-2.htm#cantomaru_1625) (access: 2018/1/20)

(四) 稲賀繁美は、海賊行為がつなぐ接触領域に動的な創造性を見出そうとしている（『海賊史観からみた世界交易史・試論』『海賊史観からみた世界史の再構築―交易と情報流通の現在を問い直す』思文閣、二〇一七、三〇九―三三三頁）。ただ、これは単なる文学的修辞ではなく、実際にこの海域は海賊の出没で知られていた。当時の英字紙には、この海域の海賊を征伐するため、ボイル提督指揮のイギリス海軍巡洋艦二隻を中心とする艦隊が派遣され、海賊の根拠地である二つの村を破壊し、多数のジャンクを焼却したニュースが報じられている（“Cleaned Up: Chinese Pirates’ Lair: British Action”, *The New Castle Sun* No.2903, 1927/03/25, National Library of Australia, <<https://trove.nla.gov.au/newspaper/article/163396638>> [access: 2019/01/25]）。

（国際日本文化研究センター機関研究員）

## 時代劇の愉しみ方

木場 貴俊

【はじめに―どたばた勝負―】

時間がない。何か書いてほしいと依頼がきたのが、締切六日前。さて、困った。あれこれ悩んでいたところ、昨年（二〇一八）の一般公開で話した内容でもよい、ということなので、それを中心に書き綴ってみよう。

昨年一月二三日の日文研一般公開は、東映太秦映画村と長岡京市の共催で「京都と時代劇」をテーマに催された。私はそこで「歴史学研究者が語る時代劇の愉しみ方」というタイトルの講演を行った。近世の怪異について研究をしている私が、何故このタイトルなのかといえば、時代劇好きなのが周囲にバレたからである。

一九七九年生れの私は、同世代と比べると時代劇をよく見ている。必殺シリーズや影の軍団シリーズ、『雲霧仁左衛門』（山崎努版 一九九五）といった、ダークヒーロー、ピカレスク、荒唐無稽な作品が好みで、逆に大河ドラマはあまり見ない。最近も『江戸の牙』（一九七九）のDVDボックスを入手して見たばかりだ。時代劇は、私にとって研究対象ではなく、あくまで趣味にすぎない。だから講演のタイトルも「歴史学を研究している時代劇愛好者が語る時代劇の愉しみ方」が正しかった。

### 【学生に時代劇をどうぞ】

実は、講演の骨子は、二〇〇九年から大学で行っている講義が元になっている。

時代劇が衰退、あるいは滅亡の危機と言われて久しい。実際、いま地上波で新作を連続放送しているのはNHK（大河ドラマと土曜夕方枠）だけである。「時代劇はお年寄り向き」というラベルが貼られて以降、若年層をターゲットにしていたテレビ局は時代劇を作らなくなった（現在は若年層のテレビ離れが進み、テレビ番組自体が存亡の危機にある）。その結果、時代劇を見たことがない若年層が大半なのが現状だ。だから、時代劇を見て知る「常識」——例えば、町奉行所の同心は黒い羽織を着て十手を持っている——がわからない。さらには、忠臣蔵も言葉しか知らない学生がほとんどである。

そこで、せめて食わず嫌いならぬ、見ず嫌いはやめてもらおうと、講義の数コマを使って時代劇を取り上げている。そこでは、時代劇とは何かを知ってもらい（講演で話した内容）、その上で時代劇と史実を比較している。前者では、登場人物がわかりやすいテレビ版『座頭市物語』やアニメ『佐武と市捕物控』を一話分見せている。後者は忠臣蔵と赤穂事件、寛政の改革（『鬼平犯科帳』、新吉原などを扱っている（講義一五回全てを使ったこともある）。

### 【時代劇とは一体何か？】

近代、新劇の対として旧劇と呼ばれた時代物の中から、映像化されたものを「時代劇映画」と称した。映画という当時最先端の文化表現で作られた時代劇は、今なお「現代」の空気や観客のニーズを読み取り、その時代に合った表現作りがなされている。批判があった二〇一二年大河ドラマ『平清盛』の暗めの映像も、デジタル・ハイビジョン化に対して試行錯誤した結果

であった。伝統芸能と同様、時代劇も現在進行形の文化表現なのだ。

時代劇の講義で、まず学生に語るのは、「時代劇はフィクション」、そして「時代劇はエンターテインメント」の二点である。歴史研究者の端くれなので考証の必要性は感じるものの、史実を完全に再現することは不可能だし、そもそも娯楽なのだから荒唐無稽でも構わないと思っている。時代劇に求められるのは、「正しさ」よりも「楽しさ」である。

ただし、フィクションは史実、とするならば、時代劇は過去を舞台にした現代劇なのか、という問いも当然出てこよう。私はその問いに対しては、違うと答える。

そこで、時代劇を便宜的に二つに分けてみる。（狭義の）時代劇と歴史ドラマである。（狭義の）時代劇は、

過去に時代設定がされていても「現代人にも面白く感じる普遍的なテーマ性と作劇法」を持ち、尚かつ「現代を舞台にすると、そのテーマ性を表現することができない」ドラマと定義する。例えば、身分違いの恋や切腹を通した武士の生き様を描くものなどだ。この場合、史実である必要はなく荒唐無稽でも構わない（未来が舞台でも時代劇として成立するが、それはSFと呼ばれる）。むしろ先が読めない展開の方が面白い。『柳生一族の陰謀』（一九七八）や『魔界転生』（一九八一）が好例だ。

一方の歴史ドラマは、「ドラマで再現する歴史」のことで、大河ドラマもここに含められる。もう少し詳しく定義すると、

「歴史そのものが含有している現代人にも面白いテーマ性・作劇法」を表現したドラマとなる。歴史ドラマで重要なのは、最初からネタバレしていることにある。大坂の陣で途中どんなに豊臣方が有利でも最後は敗北するし、坂本龍馬は暗殺される。わかりきった結末までを



如何にドラマティックに魅せるかが、作り手の腕の見せ所である。(狭義の)時代劇も歴史ドラマも現代を舞台にしては描けない。時代劇は、やはり時代劇なのだ。

### 【あんだ、この考証をどう思う?】

最近SNSで時代考証をめぐって盛り上がるのがよくある。少しでも史実と食い違えば炎上騒ぎになる場合もある。ひと昔前の時代劇を見ると、その辺りはルーズで、スタッフには時代考証ではなく「風俗考証」とクレジットされていることが多かった。これは、古く見せるための考証であって、厳密な史実の考証でなくてもよかったからだ。

現在は、大学教授らによる厳密な時代考証が行われている。だから現在の時代劇の方が時代の再現度は高い。しかし、完全な再現は不可能である。そもそも時代劇はフィクションなのだから、肩肘張らずに楽しく視聴すればよい。時代劇を語ることは、歴史を語ることと決してイコールではない。考証とエンターテインメントのバランスは、程ほどがちょうどよい。

実際大河ドラマでも、制作上の都合や視聴者の反応をよくするために脚色がなされている。二〇〇九年の『天地人』で、主人公直江兼統は「愛」の字の呪を被っている。この「愛」は、信仰する愛宕権現もしくは愛染明王の一字に由来しているが、ドラマのテーマは「義と愛に生きた直江兼統」であった(当時の愛は愛執・愛欲などマイナスのイメージで、「愛している」に相当する言葉は「お慕い申し上げる」)。また、二〇一六年の『真田丸』では、豊臣秀吉の政策を一括して「惣無事令」と表現していたが、これは中世史家の藤木久志が一九八〇年代以降に用いた学術用語である。話数と放送時間が限られたテレビドラマにおいて、秀吉の政策を一括してわかりやすく説明するための措置だろう。

ちなみに時代考証の対極に位置する作品を紹介しておこう。必殺シリーズ第二二作『必殺仕切人』（一九八四）だ。これは仕事人でも活躍した、中条きよし演じる三味線屋勇次をスピントフさせた作品で、京マチ子、小野寺昭、高橋悦史、芦屋雁之助ら大物俳優がキャスティングされている。しかし、舞台となる江戸はトンデモないことになっている。ピラミッドがあったり密林の王者やシャモジ曲げ少年が現れたり、『江戸城の菊』（ベルサイユのばら）が流行ったり…。これもまた歴とした時代劇なのである。

そもそも歴史研究は、現代とは異なる常識を持った世界を知ること、過去という異文化との交流に他ならない。時代劇も海外ドラマを見るような心持ちの方が楽しめる。

### 【国境無用】

いま地上波では昼や夕方に時代劇の再放送をしていない（UHF局は除く）。しかし、衛星放送やCSでは旧作が毎日放送され、新作も少なからず制作されている。これらの一番の視聴者はシルバー層だ。一方、時代劇はネット配信もされている。テレビ離れが進んでいる若年層が偶然見てハマる可能性もゼロではない。時代劇は、世代を超えて楽しまれてきたが、それは基本的には変わっていない。若年層はこれからも時代劇を一コンテンツとして触れていくだろう。時代劇好きな若い人たちも少なからずいる。

とはいえ、新作が作りづらいという意味で、時代劇は現在苦境に立たされている。これについては、春日太一『なぜ時代劇は減びるのか』（新潮社、二〇一四）に詳しい。『斬』（監督塚本晋也、二〇一八）のような快作も作られているが、単発の映画ではないテレビの連続ものは現在NHK以外では作られていない。そもそもお金のかかる時代劇に対して、今の番組制作予

算は削られる一方である。作られなければ、視聴されないし、スタッフが培ってきた技術や知識の継承もままならず、作ること自体もそのうち困難になる。負のスパイラルである。

しかし、世界に目を向けると時代劇は新たな局面に入っている。近年、日本で作られたものと遜色ない時代劇が海外でも作られているのだ。『沈黙—サイレンス—』（監督マーティン・スコセッシ、二〇一六）や『KUBO—二本の弦の秘密—』（監督トラヴィス・ナイト、二〇一六）などが、その代表だ。時代劇に理解のあるクリエイターが、潤沢な海外資本を使って、専門のスタッフや日本人役者を雇用して作っている。つまり、日本でなくても日本の時代劇を作ることが可能になっているのだ（『バシフィック・リム』が歴とした「怪獣」映画だったように）。ここに時代劇作りの活路があると思う。海外資本と提携して、本格的な日本の時代劇を作ればいいのだ。長期間雇用・拘束し、役者にみっちり演技指導を、スタッフに技術を仕込む。時代劇が生き残る現実的な方法だと思うのだが、どうだろうか。

#### 【おわりに—語りて候—】

これまで好き勝手に書いてきたが、言いたいことはただ一つ。時代劇は面白い。

できれば、その面白さを知っている人は、他人にも伝えてほしい。時代劇が存続するためには、まず興味を持つことが大事。良くも悪くもSNSはそのために便利なツールだ。はじめは自分が楽しみ、そして同好の士を増やすこと。初心者には優しく手解きを。まずはそこからだ。

#### （附記）

（狭義の）時代劇と歴史ドラマの区別は、作家の京極夏彦さんとの会話から導き出されたものです。この場を借りて御礼申し上げます。また、各見出しは、必殺シリーズのサブタイトル

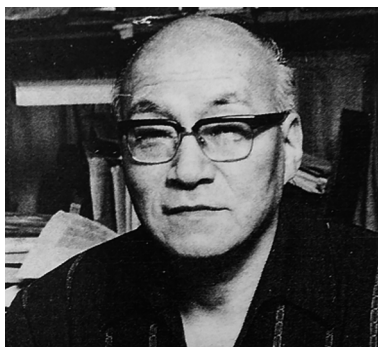
にちなんでいます。どのオマージュかわかってもらえると、少し嬉しいです。  
まずはこれまで、あらあらかしこ。

（国際日本文化研究センタープロジェクト研究員）

## 「宗田文庫」と出会って

光 平 有 希

私が「宗田文庫」の史料を初めて手に取ったのは、今から七年前の春。総研大入学の前年にあたる二〇一二年のことであった。その当時、他大学の博士課程に在籍していた私は、特別共同利用研究員として初めて日文研を訪れた。訪問初日に図書館案内をしてくださった指導教員のクレインス先生から、「医学史のことで何かつまづきを感じたら、宗田文庫と野間文庫をま



(図1) 宗田一 氏

ず覗いてみてください。特に日本医学史関連は宗田文庫から学ぶことが多いと思います。」と言われたことを、今でも鮮明に覚えている。その頃、機械論的身体観を用いた近世イギリスの音楽療法に関心を持っていた私は、西洋古典医学書が多く収蔵されている「野間文庫」には度々お世話になっていた。しかし、その時「宗田文庫」という名前は初耳。そこにはどのような史料が揃っているのか、非常に興味をそそられた。そして、「宗田文庫」所蔵史料を目の当たりにした時、「宗田文庫」「野間文庫」という東西の医学・医療に関する史料がこんなにも豊富に揃っているところが国内にあ

るといふ事実、私は心底驚いた。

その後、総研大の院生になり、近世・近代日本音楽療法の研究を開始した私にとって、「宗田文庫」は駆け込み寺のような存在になっていった。疑問が芽生えたとすぐ駆け込めるように、学生生活の大半を過ごした場所は「宗田文庫」と、その史料を見るための貴重書閲覧室がある図書館の三階だった。だから、決して大げさではなく、私の学生生活の想い出は、友人と語りあった時間も、思うように論文の筆が進まずウンウン唸った時間も、ほぼ図書館の三階にある。

とはいえ、「宗田文庫」を利用するようになった当初、これらの貴重な史料群は、私にとって呼び名こそ「そうだぶんこ」だったものの、「宗田一（そうだはじめ）」という医学史・薬学史研究者が生涯に亘り懸命に収集した、その遺史料群としての「宗田文庫」だという認識にはまだ欠けていた。しかし数ヶ月経ち、ふと院生室の本棚に置かれたファイルを眺めていた時、自らペンで書いた「近世・近代日本医療史」という区分には、作者「宗田一」の著わした論文や各種記事が数多くバインディングされていることに気づいた。そして、「もしや」と思って、常々机に置いていた『図説 日本医療文化史』を取り上げると、そこにもまた宗田氏の名前が記されていた。——それが、遅ればせながら、私にとって文庫のタイトルとしての「そうだ」ではなく、医学史・薬学史研究者「宗田一」との改めての出会いとなった。

ここで、宗田一氏の略歴に触れておきたい。宗田氏は一九二一（大正一〇）年三月に新潟県に生まれた。金沢医科大学薬学専門部を卒業後、製薬会社に入社。会社勤務の傍ら、大阪大学などで教鞭を執りつつ、漢方や蘭学の交渉史など、民俗及び文化史的な視点から医学・医療や薬の史料収集及び研究に尽力した。そして、一九九六（平成八）年七月に七五歳で死去するま

で、日本医史学会や洋学史学会でも活躍し、日文研にも共同研究員として屢々研究会に出席されていたという。また、著書・論文には『図説 日本医療文化史』『渡来薬の文化誌』『図録 日本医事文化史料集成』（共編）などがあり、数えると枚挙に暇がない。

さて、「駆け込み 宗田文庫」のお陰もあってか、私もなんとか学位を取れ、プロジェクト研究員になった二〇一六年の春。クレインス先生との会話の中で驚くべきことを耳にした。なんと、「宗田文庫」には、これまで史料登録されたものの他に未整理の史料が多数あり、それらは図書館のある一室に保管されているというのである。私は、思わず耳を疑った。というのも、現在、宗田文庫としてデータベースに掲載されている史料は、錦絵や医療関連絵巻物など図版史料だけでも一一〇四点ある。それに加え、千冊単位の医学・薬学関連の図書（洋貴重書や和装本も含む）が既に「宗田文庫」として登録されているのだ。一人の研究者が生涯をかけて収集した史料といっても限度がある。そんなに集められるものなのか――。しかし同時に、もし本当に未整理の史料があるならば、そこにはどのようなものがあるのか是非一度見てみたい。そのような強い思いがふつふつと湧き上がってきた。そして、その思いに押し切られる形で、書き物をしていたクレインス先生は作業の手を一旦止め、お忙しいなか一緒に図書館まで足を運んでくださった。

未整理の「宗田文庫」史料が保管されているのは、図書館の三階にある映像文化資料室。部屋に着きドアを開けた瞬間、目に飛び込んで来たのは、積み上げられたおよそ二百箱の段ボール群だった。その時の衝撃は今でも忘れられない。私は思わず、「少しだけ中を見ていいですか?」とお願いし、段ボール箱の一つ・二つ開けさせてもらった。そこには、宗田氏直筆のノートや史料ケース、ファイル等がギッシリ詰まっており、これらの研究の積み重ねが、私が学生時代、



(図2) 段ボールに含まれる史料ケースの一部

多くの学びを得た宗田氏による論文や著書に繋がっていったのかと思うと、なんとも感慨深かった。その後は、プロジェクト業務である日本関係欧文図書の手誌を取る合間に、空き時間を見つけては段ボール箱の中身を覗きにいくという日々が続いた。

数ヶ月が過ぎた同年の十一月、平戸への出張を京都大学・名誉教授の松田清先生と一緒する機会があった。松田先生は、生前親交のあった宗田氏の逝去後、遺史料群を日文研所蔵とすることに尽力され、膨大な数の史料確認や日文研受入のための史料箱詰め、そして既登録史料の目録作成に至るまで一手に担った人物である。松田先生と「宗田文庫」との強い繋がりについては、以前よりクレインズ先生から耳にしており、

私は、平戸出張が決まった時から、どこかのタイミングで松田先生に「宗田文庫」受入までのいきさつや、未整理史料の全容をうかがおうと、内心ワクワクしていた。

そしてやってきた大チャンスが、帰路の新幹線であった。平戸での史料調査・収集の一仕事を終え、新幹線の隣席で、ビールを片手に竹輪を美味しそうに頬張る松田先生に、私は唐突にも「宗田文庫」について多くの質問を投げかけた。質問一つ一つに先生は笑顔で丁寧な返答を下さり、私はその言葉に夢中で耳を傾けた。その中で、特に印象に残っているのは、「宗田文庫」は広い意味での薬を中心とした一五世紀末から現代まで五百年間に亘る日本医療文化史料



の一大宝庫である、と先生が力説されたことである。さらに、宗田文庫は未整理のものも含め、一次史料を中心として、研究ノート、研究書、雑誌が同心円状に見事に構成されており、しかも一冊一冊、一点一点に宗田氏の目が入っていること、そして、実証的な厳しい学風を自らに課した学者の蔵書として、後世に伝えるに値するということである。その話を聞き、私は必ずいつかあの段ボールの中の史料を整理し、多くの研究者が活用できる状態にしたいと固く決意したことを覚えている。

そして迎えた二〇一八年春。機関研究員となった私は、業務日以外の曜日を中心にクレインス先生や松田先生の指導も仰ぎつつ、また、資料課の皆さんやRAの総研大院生二名の助力も得ながら、「宗田文庫」の整理を開始した。そこでまず行ったのは、重複史料の分別と、全段ボール箱に含まれる史料の現状を崩さないよう配慮しつつ、ナンバリングした段ボール箱ごとに大枠の内容物データファイルを作成することだった。

これまで未開封だった段ボール箱をあけていくと、そこにはノート、ファイル、手帳、手書き原稿、パンフレット、ポスター、写真などの他に、モノ史料も多数出てき



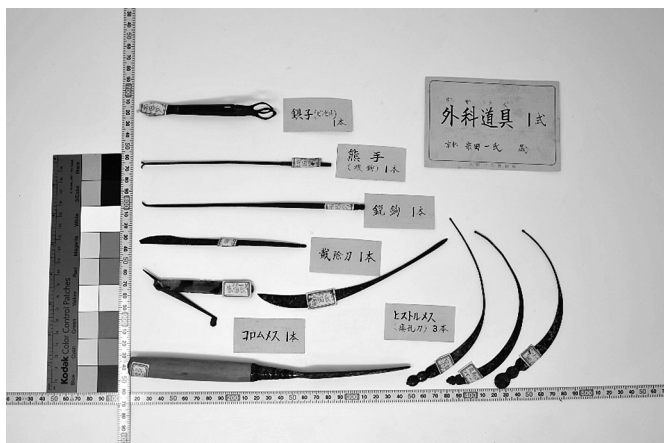
(図3) 史料整理の様子

た。モノ史料の中には、儀礼や祭事で使われる面や護符、お守りに加え、多数の薬袋や「旅行用意懷宝急用薬」「薬名扇」「薬局版本」「香道具」、さらには明治期に使用された外科道具なども含まれていた。その史料の価値の高さには目をみはるばかりである。

さらに時間をかけて一点一点の史料を見ていくと、ノート群の中には、戦時中、北部方面軍第二部隊（旭川）通信隊に徴兵されていた宗田氏の従軍手帳や、若き頃は絵描きになりたかったという宗田氏自らが描いた水彩画やスケッチの数々も出てきた。また、手帳には日々の想いが綴られ、ノートの断片には自身の集大成として人生の最期までに成し遂げたいと考えて作成された研究計画がギッシリ書き込まれている。このように史料と対峙していると、まるで史料を通して宗田氏本人と会話しているようである。会ったことはないものの、宗田氏の人柄にも触れたような気持ちになる。そして、そこから研究に対する熱い想いや向き合い方、さらには具体的な研究手法に至るまで、史料を通じた多くの御指導をいただいていることに気付く。



(図4) 旅行用意懷宝急用薬 [江戸時代]



(図5) 外科道具 [明治時代]

今後は、より詳細な内容確認を進め、資料課の方々のご協力をいただきながら未整理史料の目録作成及びデータベース掲載を模索していく予定である。今年度末(二月・三月)には、安井先生の御助力・御指導のもと、天理大学の学生さんたちにも手伝っていただきながら、大掛かりな簡易目録作成を行い、その過程で古川先生にも史料整理に関する貴重な御助言をいただいた。多岐に亘る「宗田文庫」の膨大な史料は、医学・医療分野のみならず、民俗学や宗教学、文化史、風俗史など様々な研究領域の専門家がいる日文研でこそ、研究深化の「生きた史料」になり得る大きな可能性を秘めている。段ボール箱の中に埋もれている史料が公開され、内外の研究者により様々な用途で活用される目を目標に、今後も作業に励んでいきたい。そして、この整理作業を行うにあたり御助力いただいている皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げたい。

(国際日本文化研究センター機関研究員)

## データベースからデータへ

関野 樹

昨秋、日文研において、<sup>(註)</sup> I I I F に関するワークショップが開催された。I I I F は International Image Interoperability Framework の略で、画像データを相互運用するための国際的な規格である。この規格に則って公開された画像データは、どこから公開されたかに関わらず、同じ手順で利用することができる。利用者は、自身が使い慣れた閲覧用ソフトウェアを使って、さまざまな機関のデータベースの画像を閲覧することができ、データベースごとに閲覧操作を覚える必要はない。さらに、画像の注目する部分を切り抜いて表示したり、それらを相互に比較したりすることも可能である。国立国会図書館をはじめとする多くの機関で I I I F による画像データの公開が進められており、関連学会でも、I I I F の仕組みを応用したデータの利活用に関する提案が数多くなされている。今回のワークショップにも、近隣の大学附属図書館の担当者など、センタ外からの参加があり、関心の高さが窺える。

I I I F による画像データの公開では、データを提供する側と利用する側の立場や役割が従来とは異なってくる。これまでであれば、利用者はまず Web ブラウザでデータベースにアクセスし、キーワードなどを使って必要なデータを検索する。その上で、得られたデータを Web ブラウザ上で閲覧するという手順でデータを利用してきた。検索、閲覧とも、データを提供する側が用意した機能を利用しており、提供者の意図した方法、言うなれば、見せたい形で

データを検索・閲覧してもらうことができる。

一方、IIIFで公開された画像データは、閲覧方法も含め、データの活用は利用者に委ねられる。個々のデータはデータベースという枠を離れ、それぞれ独立した研究資源として扱われる。このため、データベースは、データに辿り着くための入口の一つであり、また、そこで提供されている閲覧機能も、データ活用の一例という位置付けとなる。IIIFは、付随するデータ（メタデータ）やアクセス手段を標準化することにより、個別の画像データを独立した研究資源として扱えるようにするための規格と捉えることもできる。

データそのものを直接利用しようとする動きは、画像データだけでなく、そのほかのデータにも拡がりを見せている。その一例として、ここ数年で普及してきたリンクト・データ（Linked Data）がある。これは、Webページのリンクのように、データを相互に連携した形で公開するための仕組みである（「データのWeb」とも言われる）。提供元やデータベースの違いを超えて連携した多種多様なデータは、データの検索や解析に用いられるほか、さまざまな事象の識別や典拠を示すことなどにも利用される。たとえば、日付に関するリンクト・データでは、日本の明治以前の日付も含めて、各国のさまざまな暦の日付とリンクした形でデータが提供されている。この日付に関するリンクト・データを仲立ちにすることで、暦の違いを超えて、さまざまなデータを時間という点で相互に関連付けて利用することが可能になる。リンクト・データによるデータの公開は、研究機関だけでなく、行政機関でも試みが進んでおり、今後の拡がりが期待されている。

これらのデータそのものを活用しようとする動きの背景として、データの利用方法が多様化したことが挙げられる。画像などのデータを画面上で閲覧するだけではなく、独自の解析や

比較を行ったり、データを使った新たなソフトウェアやサービスを開発したりといったことが行われるようになっていく。AI（人工知能）への応用は、その典型例である。さまざまなタイプのAIがあるが、最近注目を集めているのが深層学習（ディープ・ラーニング）を含む機械学習の手法を応用したものである。これは、目的とする処理の判断材料となるデータをコンピュータに学習させ、その学習結果に基づいて実際の処理を行う手法である。たとえば、AIを使ってくずし字を自動認識させる取り組みが進められている。これを実現するためには、さまざまな史資料の画像から文字の見本を集める必要があり、これらの見本を使って学習した結果に基づいて、自動認識の処理が実現する。ここで使われている史資料画像の多くは、内容を読んでもらうことを想定して公開されたものであろうが、良い意味で「想定外」のデータ利活用が実現したことになる。

利用者によるデータの自由な利活用は、一定のリスクを伴うことも事実である。たとえば、データ提供者の本意ではない使われ方をするのではといったことは、誰もが危惧するところである。また、データの利用状況が把握しにくくなることも、研究評価の面で気になってくる。その反面、上述のように、自由な利用が提供者の予期しない新たな発見や研究ツールを生み出す可能性も秘めている。こうした成果は、データの価値を高めるだけではなく、新たな知見やデータの利用方法が提供者自身に還元されたり、研究コミュニティの拡大や新領域の開拓のきっかけになったりといったことも期待できる。無論、データを制限なく利用できるようにすることこそが正しいというわけではない。実際には、さまざまな段階の制限が設けられた提供方法（ライセンス）があり、試行錯誤が重ねられているところである。結局のところ、どのようにデータを公開・提供するのが最良であるかは、「何のためにデータやデータベースを公開

するか」という、提供者自身の考えに帰着する問題である。その考えに基づきつつ、データの性質や利用者のニーズの変化、および、予想されるメリットやデメリットを見極めながら、随時、判断を重ねていく必要がある。

日文研が数多くのデータベースを公開していることは周知のとおりである。それぞれのデータベースで検索方法やデータの提示方法に工夫がなされており、多くの方にご利用いただいている。データそのものを活用しようという新たな流れの中にあって、これらの有用な研究資源を今後どのように提供し、新たな可能性を模索してゆくのか、今まさに議論が始まろうとしているところである。

## 註

- 一 「トリプル・アイ・エフ」と呼称。
- 二 HuTime Project 『HuTime Calendrical Period Resources』  
<http://dateime.hutime.org/>
- 三 人文学オープンデータ共同利用センター『くずし字チャレンジ!』  
<http://codh.rois.ac.jp/kuzushiji-challenge/>

(国際日本文化研究センター教授)

## 上司としての藤原実資

堀 井 佳代子

藤原道長と同時代を生きた貴族、藤原実資の日記『小右記』は、摂関期の政治・社会を知るために欠かせない史料であり、道長の栄華を象徴するとされる、「この世をば わがよとぞおもふ 望月の…」の歌も、実資の『小右記』のなかに記されたことで、残っていることもよく知られている。

また、実資は、藏人頭を経て、三三才で議政官の一員となった有能な官僚であった。道長やその息子頼通も、実資に政務に関する事柄を問い合わせ、その助言を仰いでいる。また有能な人が概してそうであるように、実資も政務・儀式に関して厳格な人物であったようで、『小右記』のなかでも、誤った作法を行なった者に対して、「愚の又、愚なり」と厳しい文言を記している。説話であるが、『江談抄』には、右大臣であった実資が陣座で政務を執っているときに、笑ってしまった平範国を厳しく咎めた話が載せられている。しかし『小右記』のなかには、部下に対して厳しいだけではない、上司としての実資の姿が見えている。

長和五年（一〇一六）正月、後一条天皇が即位するが、三月八日には、即位を全国の神社に知らせるための奉幣使が派遣されている。このとき実資は六〇才・大納言であり、派遣当日の朝に出勤し、奉幣使に持たせる太政官符の作成作業を担当している。ここで、「畿内・七道使官符八枚、七道の幣料、正税を以て充つべき官符五（七カ）枚等なり。合はせて十五枚」が作



成された。一道につき一名の神祇官の官人を派遣するので、そのための官符が八枚と、畿内以外は幣物を地方の財源から負担させるので、それを命じる官符が七枚、合計一五枚ということになる。実資は陣座にいて、準備してあった官符を持ってこさせて、摂政道長のもとにこれを届けて、彼からの指示を受けた上で、最後の官符への捺印の作業を行なわせている。このとき道長から「雨を冒して参り行なふ。悦び申す所なり」という、ねぎらいの言葉を伝えられている。

実資は早速、捺印の作業に取りかかる。官符には「天皇御璽」と記された内印を捺すが、この捺印を担当するのは、少納言の藤原庶政と主鈴の為象（姓氏未詳）である。彼らが呼ばれ、実資の指示のもと作業を行なう。運び込まれた机の上に少納言が官符を置き、主鈴がそれに印を捺していく。このとき実資は「捺し漏らすべからず」と声を掛け、又その場にいた左大弁の藤原道方も同様に声を掛けた。主鈴が官符を机の下に一度、落としてしまったが、作業はそれ以外何事もなく終了した。

しかし、実資が陣を出ようとしていると、外記文任がやってきた。印を捺していない官符があったという。確認したところ二枚も捺していないものが見つかった。実資は怒り心頭である。「就中、上（実資）・宰相（道方）、相共に捺し漏らすべからざる由を仰す」と記しているが、「だから皆で注意しなさいと言ったのに、なぜこんなことに」という感じだろうか。また実資は捺印の作業をしていた主鈴ではなく、官符を机に置く作業をしていた少納言庶政に怒りを向けており、「少納言庶政、極めて愚頑なり」と記している。いつの時代にも、単純作業であっても、注意されていても、ケアレスミスをする人はいるのだなあと感慨深く思う。

このようなミスが発覚したにもかかわらず、実資のとった対応は「又、更に捺すべからず。

忌諱有るべし：只、披露すべからざる由を仰す」と、なかったことにしてやり過ぐす、というものであった。同日中に神祇官で奉幣使発遣の儀が行なわれ、捺印のない官符はそのまま奉幣使の手に渡った。

しかし太政官の実務官人の間では、この件に関して動揺が広がっていたようだ。左少史津守致孝は、捺印の場にいなかったが、官符を奉幣使派遣の担当者に手渡す際に気付いたようで、翌日に「西海道官符に印文無し」と実資に告げている。これに対して実資は、すでに発遣まで終わっているのだから、今になってはどうしようもない、と切り捨てている。確かに、すでに出発して九州に向かっていている奉幣使をわざわざ呼び戻して、再度、捺印の儀式を行なうのは、現実的ではないだろう。この後、大外記小野文義も、「後日、若し外漏有りて、摂政、問ひ仰せらるる有らば、何と弁じ申すか。密々に達せしめ給ふが佳く侍るか」と言ってきた。もしこのことが発覚して、摂政道長から何か問い合わせがあったら、どう説明すればいいのか、事前に道長に事情を伝えておいた方がいいのではないか、とこの状況を案じている。確かに何か懸案がある場合、問題が起こる以前に上司に連絡しておくというのは、現在の組織でもよくある危機管理の一つの方策だろう。文義は常識的な対応を提案しているように思われる。

この文義の意見に対して、実資はきっぱりと反論している。道長が知ったとしても咎められるようなことではないのだから、知らせない方がかえってよい。もしも道長から何か尋ねられたならば、ただ私の意向を示せばよい、と述べている。官符の効力についても実資は説得力のある意見を述べている。捺印がなかったのは、西海道奉幣使が持っている二通の官符のうち、幣料に関する官符だけであり、使の官符にはきちんと捺印がされているのだから、実際に諸国で用いる場合に何の疑いもない、実際に幣料を支出する際には別に奉幣使が作成する「請文」

を用いるのだから問題がない、とする。最後には「他の官符を捺す間、自ら丹の氣有らんか。分明に非ざると雖も疑ひ有るべからず」と述べ、前後の他の官符を捺すなかで、直接捺してなくても自然と朱の跡がうつっているのではないかと、少し無理矢理な主張をしている。

実資の主張は、ばれなければよい、ばれるはずがないという、ある意味大胆なものである。しかし小さなミスにびくびくしている文義や致孝のような実務官人とは違って、実資は運用上、何の問題もないと言い切っている。ここには、何か問題があれば自分が責任を取るという、肝の据わった、上司らしい様子が見てとれる。結局は実資の予想通り、この後に何か問題が発生することはなかった。そして、このような実資の対応について、「少納言庶政、悦び申し、感じ申す」と、ミスをした張本人の少納言庶政が感激した様子であったことが伝えられている。この後、庶政がこの件について何か咎められた様子も見えない。実資は特に部下の庶政の為を思って行動したわけでもあるまいが、人を厳しく非難し、糾弾しているイメージの強い彼も、実害のない範囲での誤りに対しては寛容だったようだ。

願わくば実資のような上司の下で働きたいものだ。なお、長元二年（一〇二九）、美濃守に出世した庶政は、実資のもとに絹五〇疋を進上している。あるいは、一三年前に受けた恩を覚えていたのだろうか。

（国際日本文化研究センター技術補佐員）

## もういちど、動物園の世界へ

久米 舞子

夫婦で未就学男児二人を育てている。

子供が生まれて以降、私は大学で教えたり、この国際日本文化研究センターで研究員等として勤務してきた。しかしいずれもパートタイムの仕事であり、かつ居住する市は待機児童ワーストランキング上位常連であるため、保育園への正規受け入れは到底望めないできた。保育園の一時預かりや、一般家庭に預かってもらうファミリーサポートを駆使して、何とか仕事と研究を続けている。

夫はフルタイム勤務のため、勤務日以外の平日は私が子供たちと過ごすことになる。もちろん研究ができるような環境にはない。パソコンを開けば、キーを押そうとする子供たちに狙われるし、本を読んでいれば、そんな暇があるならこの絵本を読み聞かせよとの要求が厳しい。論文は、あつという間に落書き用紙にされる。

エネルギーの塊のような子供たちに、それをいかに発散してもらうかは、常に大きな課題となってきた。とりわけ次男の育児休暇取得中や、ようやく幼稚園に入った長男が不登校ならぬ不登園であった期間（その後転園した）、また幼稚園の長期休みには、頭を悩ませてきた。

近所の公園に行ってもいいのだが、毎日となると実のところ、私の方が飽きてしまう。せつかくならば、子供たちが楽しむことはもちろん、私にとっても何か得るものがある場所はない

かと考えていた。

そうして、動物園に通うことになった。

ここ二年近く、子供たちのお気に入りのテレビ番組は、動物のドキュメンタリー（NHK「ワイルドライフ」、Dlife「ボンダイビーチ動物病院」）で占められている。彼らは（「機関車トーマス」を例外として）幼児番組の視聴を全てやめて、録りためた動物ドキュメンタリーを、毎日ちびちびと見ている。

また長男は、図鑑を愛読している。図鑑というのは名前を調べたり、項目を索引で引いて調べるツールだと私は思っていたのだが、長男は初めから終わりまでを熟読し、次の図鑑へ進む、という読み方をしていて驚く。動物図鑑、恐竜図鑑は二冊、三冊と揃え、しかも複数の図鑑を並べて比べるということまでしている。研究者タイプといえようか。

そんな彼らならば、動物園はもってこいだろうと考えたのだ。

私自身はいえ、幼児のころは何度か動物園に連れて行ってもらった記憶があるが、それほど頻繁ではなかったし、その後自分の意思で出かけたことは一度もなかったように思う。動物園についての知識は乏しいが、であればこそ何か新しい発見があるかもしれない。

私たち家族は大阪府に居住しているため、京阪神の大阪市天王寺動物園、神戸市立王子動物園、京都市動物園を中心に、池田市の「日本一小さい」五月山動物園や、水族館、箕面や伊丹市の昆虫館もこれに加え、ひと月に二、三度のペースで訪れるようになった。

子供たちのお気に入りには、何といってもキリンやゾウである。動物たちの、映像とは異なる存在感や迫力を感じ、食事や排泄を目の当たりにして、視線があったと一喜一憂する。本来ならば遠くアフリカのサバンナやアジアの森林に暮らす動物たちと、同じ空間に生きているのだ

と間近に体験できることは、他では得難い経験である。

旅行や帰省先でも、まず動物園がそばにあるかを調べるようになった。これまで旅行といえど、私の研究の関心上、遺跡や歴史系の博物館めぐりが定番であったのだが、これに動物園が加わった。四国にまで渡ったものの、行った場所は愛媛県立とべ動物園だけだったこともある。広々としていて、とてもいい動物園だった。

昨夏はフィンランドに旅行し、ヘルシンキに滞在することがあった。しかしながら、子供は都市には向かない。街歩きやショッピングはことごとく拒否され、強行しようとすれば地面に寝転がって抵抗するため困り果てた。そこで村上春樹がエッセイでヘルシンキの動物園について書いていたのを思い出し（「シベリウスとカウリスマキを訪ねて」、村上春樹『ラオスにいたい何があるというんですか?』所収）、コルケアサリ・ズーをめぐり歩くことになった。ここはコルケアサリという島全体が動物園になっている。これまで見てきた日本の動物園に比べると、動物の展示区画がかなり広い。そこに丈の高い草木がいれば自然に近い状態で生えていて、動物がどこにいるのか、はたまた屋外に出ているのかどうかさえよくわからないことがあった。人間が見ることよりも、動物が隠れたり休んだりできることを重視しているように感じた。

溝井裕一『動物園の文化史』によれば、オーストリア・ウィーンのシェーンブルン宮殿には、マリア・テレジアの夫フランツ一世が設けた動物園が今も開園しているそうだ。シェーンブルン宮殿には行ったことがあるが、動物園があることは気にもとめていなかった。動物園めぐりはじめて、旅行の楽しみが一つ増えたと感じている。

日本における近代動物園の嚆矢は、一八八二年開園の東京都恩賜上野動物園である。内務

省、農商務省、宮内省を経て、一九二四年に東京都に下賜された。そのあいだ、一九〇三年に京都市動物園、一九一五年に天王寺動物園、一九一八年には名古屋市東山動物園の前身となる動物園がつくられている。上野公園（東京）、岡崎公園（京都）、天王寺公園（大阪）は、いずれも明治の内国勸業博覧会の会場にあたる。動物園のはじまりと博覧会とは、関係が非常に深い。

京都市動物園といえは、日本古代・中世史では、白河天皇が発願した法勝寺の跡地にあたり、八角九重塔跡にレトロな観覧車が建つという、象徴的な風景が有名である。天王寺動物園では、毎年夏になると「戦時中の動物園展」という企画展が行われる。ここでは猛獣処分された動物の剥製や、軍装をして戦意高揚に利用されたチンパンジーの写真を見ることができ、戦争と動物園を描いた物語としてよく知られるのは、上野動物園を舞台にした絵本、土家由岐雄『かわいそうなぞう』であろう。また小出隆司『ぞうれっしゃがやってきた』も、子供たちとよく読んだ。国内で唯一ゾウが戦争を生き延びた名古屋市東山動物園には、戦後ゾウを見たいという子供たちからの熱心な陳情が寄せられ、これに応じて子供たちを乗せ名古屋へ走った特別列車が「ゾウ列車」である。

日本でも動物園は一〇〇年の歴史をもっている。動物園もまた、近現代の歴史をくぐりぬけてきた。絵本や展示写真のなかの動物は、今目の前にいる動物につながっている。過去・現在の戦争について、子供たちにどう伝えていくのかは、親として気に懸けているところであるが、動物や動物園という子供たちにとって身近な存在は、それに思いをめぐらす回路として特に優れていると感じている。

またそれなりの頻度で動物園に行くようになり、動物園が抱える課題や矛盾にも気がつくよ

うになった。日本では、動物の高齢化が進んでいる。しかしゾウやゴリラ、ライオンなど人気のある動物は、ワシントン条約で売買が禁じられており、容易に手に入れることができない。そこで国内での繁殖を進めようと、動物を移動させたり、群れをつくる動物は群れで飼育しようとして一ヶ所に集める動きがあるようだ。しかし人気の動物がいなくなれば、動物園の集客力が落ち問題となる。天王寺動物園でも、一九七〇年の大阪万博を記念してインドから贈られたアジアゾウのラニー博子さんが、二〇一八年一月に亡くなり、ゾウがいなくなってしまう。こうした課題への対応であろうか、地域の在来種を展示する動物園が増えているように思う。

都市に住む私たちの普段の生活のなかで、人間以外の生き物に接する機会はほとんどないといっているだろう。子供がいればこそ、セミの抜け殻を集めて歩いたり、バッタを捕まえてカエルの餌にしたりするが、そうでなければ自然がすぐそばにあることすら忘れて生活をしている。人間、特に大人は不確定要素を排除して、身の回りの環境をコントロールしようと考えがちであるが、人間が見ようとしていないだけで、実は人間の生活のすぐそばにも野生動物の生活がある。夜の住宅街で、タヌキらしき動物のキラリと光る目と目があったことがある。家の屋根裏にハクビシンに住みつかれたという友人がいる。ここ国際日本文化研究センターには、ニホンジカが窓から見えるという共同研究室があるし、動物の糞が点々と落ちていているけもの道が、敷地内を通っていることも知っている。動物園に通ううち、動物たちは今も人間と隣り合って生活しているし、人間と動物の暮らしは地続きなのだと考えることが増えたように思う。

むろんいかに動物園が教育施設としての側面を強調し、また自然保護を謳おうとも、先の『動物園の文化史』がいうように「どのような建前をとったところで、動物園は結局、動物た



ちを本来の環境からきりはなし、人びとの「まなざし」のもとへさらす装置であることにかわらない」。それでも、人間本位であるのは承知のうえで、動物園が失われる、あるいはヴァーチャルに置き換えられるようなことになれば、人間の自然に対する想像力は、さらなる後退を強いられるのではないか。動物園という世界に改めて足を踏み入れた私は、そのように思うのである。

最後に。つい先日二〇一九年一月一五日、神戸市立王子動物園のチンパンジー、ジョニーさんが亡くなった。王子動物園にやってきたのは開園四年目の一九五五年、推定六九歳で、国内最高齢であったという。王子動物園の生き証人であり、阪神・淡路大震災も経験してきたジョニーさん。彼の訃報を聞いて、このエッセイを書こうと思い至った。ジョニーさん、ありがとう。

（国際日本文化研究センター技術補佐員）

## 史料を読むということ

呉 座 勇 一

拙著『応仁の乱』の刊行以降、様々な職業の方とお話する機会が増えた。それらの経験から推測すると、どうも歴史研究者の言う「研究」がどのようなものか、一般の人には分かりにくいようだ。

歴史研究とは、史料を通じて過去の事実を明らかにする営為である。そして史料とは人間の行動や思考の痕跡である。考古学の発掘調査によって発見された遺跡なども史料だが、歴史学で主に扱う史料は、文字で書かれた文献資料である。

特に日本史研究の場合、多くの文献資料は日本語で書かれているので（近代以降は外国語史料も増えるが）、日本人なら誰でも読めると錯覚する人も散見される。もちろん前近代を研究する場合、「くずし字」と呼ばれるニョロニョロ文字を読まなくてはならないというハードルがあるが、活字化されているものも少なくない。

たとえば織田信長が出した現存文書は『増訂 織田信長文書の研究』（吉川弘文館）という本に網羅されている。しかもこの本は、読み下し文や内容解説も載っているので、一般の方でもとつきやすい。こうした便利な本を使えば、誰でも歴史研究ができるかと勘違いする人が出てくるのも無理はない。

しかし、前近代の史料はやはり現代文とは違う。高校で習う古文・漢文の知識は必須だが、

それだけでは十分ではない。私が専門とする中世史の場合、多くの史料は和製漢文（変体漢文）で書かれている。和製漢文というのは本場中国のそれとは異なる日本風の漢文のことで、仮名が混じらず漢文だけでつづられているが、正規の漢文にはない独自の用字・語彙・語法を含む。文末に「ゝに候」と書いたりする、あれである。この和製漢文に慣れないと、中世史料を正しく解釈することは難しい。

だが文法・語法を頭に詰め込み、和製漢文のパターンをある程度把握したとしても、正確に読解できるとは限らない。以下に一例を挙げよう。

天正一〇年（一五八二）六月二日に本能寺の変が起こった時、徳川家康は僅かな供を連れて堺を見物していた。家康は京都に戻る途中に凶報に接し、命からがら本国の三河に逃げ帰った。俗に言う「神君伊賀越え」である。この時、家康に同行し途中で別れた穴山梅雪が命を落としたことから（諸史料から落ち武者狩りに遭ったと考えられている）、伊賀越えがいかに危険な逃避行であったかが強調されてきた。

ところが、この通説に対し、在野の歴史研究家である明智憲三郎氏が異を唱えた。徳川家康は本能寺の変を事前に知っており、逃亡計画を十分に練っていたため、安全に三河に帰れたという。しかも家康は、道中で邪魔者の穴山梅雪に切腹を強要して、後にその領土を奪ったと主張している。

この珍説の根拠として挙げられているのが、徳川家康の家臣である松平家忠の日記『家忠日記』天正一〇年六月四日条である。「家康いか伊勢地を御のき候て大濱へ御あかり候而町迄御迎ニ越候、穴山者腹切候、ミちにて七兵衛殿別心ハセツ也」とある。家康が伊賀、伊勢を経て海路で三河の大浜（現在の愛知県碧南市）に到着したので、松平家忠が迎えに行ったのである。

る。なお七兵衛殿とは、織田信長の甥で明智光秀の娘婿である津田信澄のことである。光秀の縁者なので本能寺の変への関与を疑われたのだ。

明智氏は「穴山梅雪は一揆に殺されたのではなく、自分で腹を切ったのです。しかも、大浜に帰り着いてから切腹したと読めます。また、信澄謀反は噂に過ぎないと「聞いた」という伝聞の書き方をしているのに対して、梅雪切腹は伝聞の書式をとっていません。自分自身で確認できたこととして書いています」と解釈している。要するに松平家忠が穴山梅雪の切腹を目撃した、あるいは梅雪に切腹を強いた当事者（家康家臣）から直接情報を入手した、という理解である。

字面だけ追っていると、そういう解釈も成り立つように見える。しかし残念ながら、活字になっている刊本だけを見ている場合にのみ成り立つ議論である。原本とは言わずとも、写真だけでもチェックした方が良い。

『家忠日記』の天正一〇年六月三日・四日条は後からの書き入れが多く、記述が整理されていない。津田信澄が謀反に参加しているという噂を聞いた後、「信澄の荷担はデマらしい」と後で否定するなど、本能寺の変に関する正確な情報が入らず混乱している様子がうかがえる。

次から次へと入ってくる真偽不明の情報を処理しきれず、手あたり次第に書いているだけだから、「家忠の記述の順」に深い意味はないし、「穴山者腹切候」と断定的に書いているから伝聞情報ではないという解釈にはならない。

仮に家康が梅雪を切腹させたのなら、家忠は切腹の経緯を家康周辺からいろいろ聞けるから、『家忠日記』にもう少し詳しい記述があるはずだろう。伝聞情報だから「腹を切った」としか書いていないのだ。『家忠日記』の記述は、本能寺の変という予想外の事態に直面した家

忠が動転していることを示しているにすぎない。

史料を読むという行為は、逐語的に解釈すれば良いというものではない。記主が常に文法・語法的に正しい文章を書くとは限らないことを念頭に置き、高校古文・漢文的に無理やり訳すのではなく、文章の乱れに注意し、乱れている原因（たとえば記主の心身の不調）まで考えなくてはならないのである。

さらに明智氏は、徳川家康と明智光秀が共謀していたと論じている。「実は家忠の日記を読んでも、どこにも出陣の目的が「光秀討ち」にあるとは書かれていない」から、家康の出陣は「光秀討ち」ではなく実は「光秀救援」なのだ、と主張する。けれども、光秀討ちと書いていないのはそれが自明のことだからだ。

松平家忠は織田信長を「上様」、信長の息子の信孝を「三七殿」と呼び、光秀のことは「明知」と呼び捨てである。家忠から見ても光秀は謀反人にすぎないのだから、出陣と書けば、謀反人光秀の討伐に決まっている。もし出陣の目的が光秀討伐ではなく光秀救援としたら、家忠は驚愕し、そのことを日記に書き記すだろう。

拙著『陰謀の日本中世史』でも指摘したが、陰謀論を唱える在野の歴史研究家は、史料に書いてあることをきちんと読まずに、「史料に書いていないこと」に過剰な意味を求めがちだ。史料に書いてあることはきちんと読解しなくてはならないが、「史料に書いていないこと」については想像を好きにだけ膨らませることができからだ。

私たちは史料を介してしか歴史的事実を解明することはできない。この当たり前の真理を自覚しながら研究を進めることは、思ったより難しいのである。

（国際日本文化研究センター助教）

## センター通信

「日本の風」国際シンポジウムに参加して——  
「大衆文化研究」の余白に

稲賀 繁美

和風といえど、かつては独楽と並んで、正月の男子の遊戯の代表だった。現在「日文研」の研究業務上の重点をなしている「大衆文化」とも接点をもつ話題である。だが和風については、いくつかの地域行政の取り組みや、現場の保存会、風職人さんたちの努力はみられるものの、学術研究できちんと対象にされることはないままに推移してきた。現在、学術振興会の外国人枠の研究費支給を得て、日文研の外来研究員となっているセシル・ラリが二〇一八年二月二〇—二一

日、パリの国立美術研究所講堂を会場に、二日間にわたり、前代未聞の国際和風シンポジウムを開催した。一般公募により発表者を募った本会議は、英語とフランス語とを使用言語として営まれた。筆者はラリ氏の経理上の受け入れ教員を拝命している関係で、風についてはまったくの門外漢ながら臨席を所望され、学術発表の片棒も担がせていただいた。本国際シンポジウムは科学研究費補助金事業であり、受け入れ機関としての日文研のロゴも開催通知に明記されており、日文研における学術動向とも無縁ではない。機能強化費の名目で運営される「大衆文化研究」とは別枠ながら、以下簡略に報告する。

## 一、遊戯と絵柄と

会議の副題には「諸技藝の交差点」とあった。実際、凧は単一の研究対象をなすというよりは、さまざまな関心の交錯するなかに浮上する。制作の現場、美術史的な分析や文学などへの派生。子供の遊戯としての意味づけ。大衆による受容と史の変遷。保存・振興事業の現状。海外の現代美術動向との連動。現在の保存活動動向の社会的な分析――これら様々な観点から、各国の研究者や愛好者が報告をもちより、蘊蓄を傾け、熱心な討議がかわされた。

和凧の起源は中国南部に求められるようだが、海路を伝う伝播経路からは逆に東南アジアや台湾との関係も無視できない。長崎では阿蘭陀経由の意匠も無視できない。シーボルトの御用絵師だった川原慶賀は長崎の年中行事を詳細に描写しているが、「おくんち」と並んで凧あげの風物も忘れずに描出されている。クラウディア・マラーはその絵柄や意匠について、文字や抽象的な記号に至るまでの多様な語彙を、独自の記号論的分類を駆使して詳細に分析した。帆船航海術の旗信号とも関係がありそうだが、実際には別系統なのだろう。

いわゆる浮世絵、錦絵版画にはとりわけ一九世紀にはいる

と、凧あげの情景が盛んに描写される。民衆図像に関する図版を満載した研究書・啓蒙書の著者としてフランス語圏でよく知られるブリジット・小山リシャルは、凧が遊具にとどまらず、役者の似せ絵が禁止されると凧の絵柄に変装した事例や、同時代の政治的風刺が凧の絵柄に託された例に言及した。また凧の錦絵で英語圏で著名な収集家のポール・チャップマンが、自らの収集を持参し、凧笛の実演なども交え、演壇を往復しつつ報告した。デイヴィッド・カーンは自ら「青山博物館」Blue Mountain Museumを開設した著名な凧収集家だが、武者絵の図像学について精確かつ該博な知識を披歴し、弁慶と牛若、桃太郎、金時や渡辺の綱の鬼退治といった定番の意匠が、近代を迎えるや日清戦争期以降、日本人の制服へと軍装を改め、やがて田川水泡「のらくろ」などへと変奏を遂げてゆく推移を浮彫にした。カーン氏本人には理論化の志向はなかったが、これらは記号学的には「間――絵画性」Interpictorialityの実践例、「シケチ重層写本」palimpsesteの活用例であり、こうした研究志向は、従来の錦絵版画研究の枠を拡大しつつ刷新する契機となる。

そもそも凧を揚げるとは、いかなる遊戯なのか。宮崎康子は幼児の自我の発達過程において、ままならぬ外界との調整



図版1 自ら収集した風の絵柄を分析するデイヴィッド・カーン氏  
(撮影・稲賀)

を経験する遊戯として、風あげの特異性と意義を強調した。カイヨワの遊戯の分類には収まりきらない浮遊性が風には付随する。カイヨワ自身も、風あげは上空の「天」に向けた探究であり、特異な大気条件を「聴診」することで、操縦者は自己の肉体を脱して自己の現存を投企 *projeter* する、と述べているのは、宮崎氏も指摘するとおり。

稲賀は文学における風を論じるという課題を授かったが、宮崎氏の発表を受け、与謝蕪村の句、「いかのぼり 昨日の空のありどころ」一句に限定して、風あげ体験の詩論 *poétique du cerf volant* を試みた。一六五〇年代の幕府の「烏賊幟」禁令により幟の名称が「風（タコ）」に転換したが、「いかのぼり」は俳諧では正月の季語として延命する。だが、なぜ中空に舞う風は昨日の、そして過去の光景を想起させるのか。天と地との間をあてどなく揺蕩う、はかない存在、風頼みで人間の側の制御を超えた浮遊物を糸で操る頼りなさ、さらには未知の世界への通い路としての風。そこに人びとは、魂の浮揚する姿を託したのではなかったか。

## 二、喧嘩風…祭礼と観光資源と

シルヴィ・ブロッソは、新潟・白根の大風を闘わす祭りを



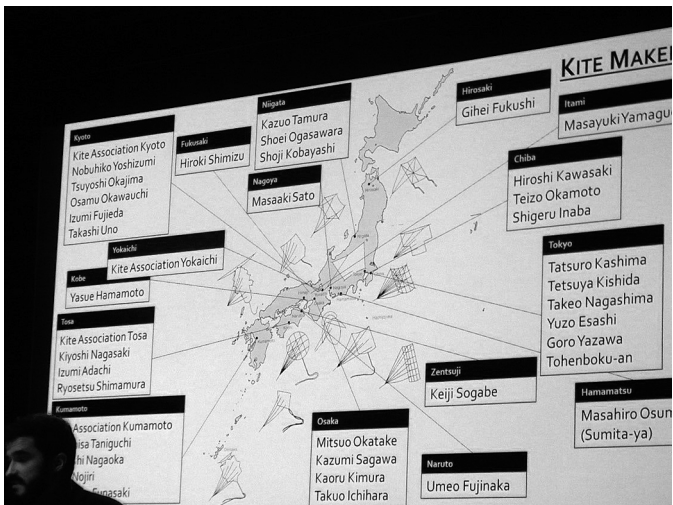
話題とした。河川と用水路に囲まれた輪中の地理的な特殊性、街道の開発にともなう集落の自己意識の変遷にともない、巨大な風競技が集落をまとめる韌帯と化し、地域の維持刷新の要となる。その白根では町をあげて風と民具を中心とした博物館を運営している。セシル・ラリはこの事例を分析した。祭礼にあつては風のみならず仮設の飾り物は、最後には壊して捨てるのが一般だろう。それが翌年への継承を司る歳月の運行と回帰に不可欠だからだ。だがだとすると、風を保存するという博物館の志向は、風をめぐる行事の本性とは背馳しないだろうか。筆者はそうした素朴な質問を試みたが、この問題は、竹や和紙、綱引きの縄にいたるまで、風制作の原材料が現地供給でなくなりつつある現実、祭りの将来への存続とも裏腹の事態なのだという。

風はどこまで、いかにして日本文化と関連づけて海外で認識されてきたのか。オリヴァー・ペンジャミン・ヘマーレは、商標や絵葉書、マッチ箱の意匠など幅広く対象を踏査し、欧米における日本表象のなかでの風を分析した。二〇世紀前半を迎えても、ジャンク船を風で曳航するといった荒唐無稽な異国趣味が、商標や舶来品広告図像にはなお生き残っ

ており、そこでは現実と空想のみならず、日本と中国さらには東南アジアも混交をやめない。スヴィトラナ・シールズはロシア語文化圏に視点を移し、マルク・シャガールの空中に浮かぶ人物像に注目し、地上のシャガールと手を取り合つて宙に漂う愛人ベラの姿には、日本の奴風に由来する想像力が働いているのでは？という仮説を展開した。まだ立証、とまではゆかない恨みはあるが、確かに二〇世紀前半にパリに移住した放浪の藝術家たちが、空に漂う魂に憧れ、そこに郷愁を託したことは否定できない。これは評者による蛇足だが、思えば風の代わりにニューヨーク摩天楼上空に飛行機 *Point d'interrogation*（「疑問符号」）を飛ばせ、パリのセーヌ河上空には飛行船 *Dirigable*（「操作可能号」）を浮かべたパリ在住の銅版画家・長谷川潔は、シャガールとも同時代人。またフランクリンの雷雨のなかでの風あげ実験を、フィラデルフィアで避雷針の記念碑に仕立てたイサム・ノグチは、パリ時代にシャガールとも交友があった。敗戦後イサムの友人となる岡本太郎もまた、機械は嫌いだと公言しつつ、巨大な極彩色の飛行船 *dirigable* に、龍か奴風よろしく目玉を付けて、大空に浮かべる夢を共有していた。

### 三、風と現代美術

スコット・スキナーは風関係書籍出版のため「龍基金」Drachen Foundationを立ち上げた自称「タコキチ」のひとりだが、現代にいたるまで、世界各地で現代美術家たちがいかにあらたな風を次々に発案し空に浮かべてきたかの委細を、圧倒的な図像と情報量とともに提供した。幾何学的な立体造形からNASAが開発した宇宙風まで、話題は拡大してゆく。質疑応答では、自前の動力を必要とせず、しかし地球の重力なくては機能しない風という浮遊装置の流体力学的な機構に関する専門的な議論も展開された。つづくステファノ・トリノは具体美術連盟の吉原治良やミッシェル・タピエが企画した「空の祭典」Sky Festival（一九六〇）に端を発し、一九九〇年代までドイツ人パウル・オイベルを主導者として世界の著名な現代藝術家たちが風制作を競った事実を、克明なドキュメントによって復元した。白髪一雄からラウシェンバークに至る藝術家たちにとって、美術館という白い立方体while cubeの壁の内部に作品を安置するのではなく、自らの創造を大空に羽ばたかせようという熱意は、けっして一過性のもものではなかった。翻って、一九七〇年代を迎えた日本では都市化の進行と電線が張り巡らされた住宅環境への配慮か



図版2 日本の風製造者と形態分布・ステファノ・トリノの発表  
(撮影・稲賀)

ら、小学校でも風あげが推奨されるどころか禁止され、この世代で風を作り、それを大空へと揚げる技術の伝承も、プツンと途絶えてしまったことが、教育史の歴史的事実として確認された（宮崎康子氏の報告）。

大衆の遊戯だった風あげは、バブル経済の末期に、美術的な祝祭の演出媒体として世界的な脚光を浴びた。いまや過去に属するその実験的壮挙の成果総括も含め、二〇一〇年代を迎えて、風はようやく学術的研究や、行政的保存事業の対象へと変質を遂げつつあるようだ。

最後の発表者となったアニー・クローストルはそうした現状を受けつつも、二〇一八年の第一八回リヨン現代美術ビエンナーレの主題が *le monde flottant* つまり「浮世」とされ、野外で多くの風が揚げられた実績を扱った。「タコ街道プロジェクト」の島袋道浩もフェスティヴァル参加者のひとりだったが、若い日本の作家には、日本列島の軌を離れて欧州で風に創作の夢を託する創意も見られる。この将来展望はそのまま総合討議に持ち越される。

不肖・稲賀はこの討議の司会進行役を仰せ遣ったが、議論を受け、ひとつ指摘した。中国語の風は鳥に風や笛といった「息吹」に由来する漢字を組み合わせた語彙からなる。風は



図版 3 会議休憩時間中 演壇に並べられた収集品を囲んでの意見交換（撮影・稲賀）

「氣」を乗せつつ、大氣中を漂うわけだが、「息吹」とはヘブライ語のルーアハ、それを訳したギリシア語がブネウマ、インドではブラーナ、そしてブネウマのラテン語訳がスピリトゥス。つまり息吹＝風は精霊に結び付く語彙であり、その魂の申し子が風でもあった。「天」と「地」のどちらにも属さず、しかし受動と能動の間で両者を繋ぐ「霊」。三位一体の玄義に肖うならば、天（神）と地（キリスト）との間を媒

介する「精霊」としての風の存在論、あるいは神学が、洋の東西を跨ぐ全球的な比較文化的視野で、いまこそ期待されているのかもしれない。

議論は懇親会会場に場を移して続けられた。地下鉄サン・ポールの駅近く、「二十のワイン」と題する若い日本人経営の小さな店。画廊を兼ねており、パリ在住の日本人写真家、清真美（きよし・まみ）による日本の風職人に取材した写真の展覧会が開かれていた。同じ作品展は、日文研でも、セシル・ラリ氏の evening seminar に併せ、実施が予定されている\*。

（国際日本文化研究センター教授）

（二〇一九年一月六日稿）

\* The Kites of Shirone - How to Make a Small City Known Worldwide  
は二月七日に実施された。

「近代中国革命の思想的起源——日本からの建国思想の受容を中心に」第一回共同研究会の感想

楊 際 開

二〇一八年四月二八―二九日に亘って、小生の主催による共同研究会「近代中国革命の思想的起源——日本からの建国思想の受容を中心に」の第一回研究会が行われた。初日は戦争史家の姜克實氏と中国外交史家の岡本隆司氏に基調講演をお願いしたので、お二人の講演の主旨や意味を中心に感想をしよう。

初日には姜克實氏と岡本隆司氏による基調講演が行われた。まずは姜克實氏の講演の「近代化におけるナショナリズム、アジア主義の位相——日本のアジア主義と革命」という演題における問題提起を取り上げたい。姜氏から見れば、日本のアジア主義と近代中国革命は、いわば「国家的情念」から生まれた双子のような関係にあるようだ。「アジア主義には近代と伝統にまたがる二つの側面があり、近代の側面（ナショナリズム）は中国の革命、近代国家の成立をもたらしたが、伝統的側面は、戦前の「大アジア主義」的国家関係をつ

くり、またアジアにおける市民社会の形成を妨げ、戦前日本の天皇制国家と、今日の「特色ある社会主義」の社会基礎を孕んだ」という。確かに日本のアジア主義は「政治主義」（植村和秀『丸山真男と平泉澄——昭和期日本の政治主義』柏書房、二〇〇四年参照）の延長にあり、中国現代国家の政治的起源と考えてよいだろう（趙軍『中国における大アジア主義・「聯日」と「抗日」のあいだ』ミネルヴァ書房、二〇一八年参照）。

楊度の鉄血（帝国）主義、梁啓超の大民族主義及び孫文の大アジア主義は、その象徴的な存在である。改良派と革命派の立場の違いは、満州王朝という国体を温存するのか、漢民族の「国体」をつくるのかにあった。いずれも彼らの明治日本観と関わっている。東アジアの政治史は日中間の政治的敵対関係を存在論的にとらえてきた（衛藤藩吉『東アジア政治史』東京大学出版社、一九六八年参照）。アジア主義が中国革命と近代国家の成立をもたらしたという姜氏の指摘は、実際に満・蒙・蔵・苗・回を合一する「大民族」を唱えた梁啓超の果たした役割を思えば、示唆に富むものである。これは中国現代国家の政治的起源という別の研究課題になる。梁啓超の大国民主義と浮田和民の西洋レンズの大国民主義と

の「思想連鎖」的な関係が考えられよう。日本発信の「大アジア主義」は日清・日露戦争を経て日本国民全体の思想的傾向となった。

マルクス史観は「天皇制」を標的にし、「天皇制」を無くさない、自説が成り立たなくなる。対してアンチ・システム論のグローバル史観は「天皇」を「制」＝システムと切り離してグローバル性の出発点としてその存在理由を評価する。明治維新後の廃藩置県は中国の郡県制の最後の到達点として、中国式の君主主権を人民主権に転換させる契機が含まれている。明治維新後、伊藤博文はシュタインなどの立憲思想を利用して、天皇にキリスト教の代理機能を付与しようとし、後の丸山真男の近代主義的な政治学を生み出したわけだが、解釈次第で、天皇の意味は、太平天国のようなキリスト教受容に対峙する東アジア文明の存在論的な砦ともなり得る。近代日本は太平天国後、清朝中国との秩序再建の競争に登場したのである。

つまり神の国の発見は、もう一つの東アジア文明の精神の発見でもある。そもそも吉田松陰は太平天国の衝撃を受け、西洋レンズの帝国観から脱出して、東アジア文明規模の天下観に目覚めた。太平天国は東アジアにおいては最初のアン

チ・システム論のグローバルズム運動である。松陰の道徳的エネルギーは、西洋の衝撃から在来文明の存在論的基盤を保守するために生まれたものである。それを法原たる天皇に外見化・礼儀化して、東アジア文明の政治的客観化の道が開かれたのである。漢字や儒教の天下観念は彼にとって自己の存在証明であり、アイデンティティでもあった。幕末から維新を推進してきた幕末志士の道徳的エネルギーこそ、東洋文明の存続を可能にしたものだった。その出発点がアンチ・システムである。つまり明治維新を生み出した動機は幕府統制からの解放だけではなく、在来文明を保守することにもあった。しかし、このアンチ・システム運動は日清戦争をへてシステム運動に変わっていく。近代の戦争は革命に起源し、やがて国家統一の名義で、道徳強制が強いられていく。

東アジアは皇帝権と文（書き言葉）との世界だけではなく、「地方」統治権と言（話し言葉）との世界でもある。東アジア秩序において日本、ベトナム、朝鮮、チベット、蒙古、ウイグル自治区、満州、各省と東南アジア諸国はほぼ同格だが、明治日本をはじめ、西洋化されていくうちに、東アジアの文明全体が存在論的な危機に晒されはじめた。ここから東アジアの王道を守るための大東亜戦争論が出てくる。覇

道日本に王道の精神を読み取った中国近代革命が、その思想的起源の日本を自らの来歴として語るのと同じ問題である。

「伝統」と「近代」とは二分法的な対立関係ではない。また「任侠」の挫折から国家・国民意識の誕生という姜氏の論法も、吉田松陰などの幕末思想と辛亥革命との接点を念頭に置いていない。国家建設にも「任侠」的な道徳的エネルギーが必要である。近代的国家・国民意識よりも、吉田松陰的な汎アジア的天下思想と「大アジア的」国家関係との違いに着目する必要もある。「市民」を論ずるとき、「天下」を管理する「公民」（鈴木正幸など編『比較国制史研究序説』柏書房、一九九二年参照）も考慮に入れなければならない。例えば、小路田泰直は「日本の支配層はその主権の創造を、アジア的「三元性」の頂点に立つ教養官僚制の文化的同化力の読みかえに託した」（同書、三二五頁）と主張するが、吉田松陰は柳宗元を道統に入れることにより、朱子学的道統観を政治学的に再解釈した。士道（官僚・学者）に近代的な公民の意味合いを付与し、「三元性」を「二元性」にすることではなく、「三元性」との機能的連続性を保ちながら、その道統的な中味を道徳から政治に変えたのである。

徂徠学的な「外」的・政治学的思考は山陽・松陰を経て



「内」的に道德化され、行動主義に走り、明治維新後、近代国家思想の土俵の上に王霸論として再構成されていくが、韓非子の思想は専制擁護から社会統合にその現代的意味が見出された。山陽思想と幕臣との関連という濱野靖一郎氏の指摘も大変興味深い。幕臣も明治維新の立役者なのである。昨今、議論の土俵がグローバリズムに変わっているなかで、人権思想を共通のベースとして、山陽や松陰による日本発信の孟子学的仁義論は地球規模の「天下」に関する言説になりうるのではないか。ここから岡本隆司氏のご講演の意味が出てくる。つまり、翻訳概念は目的ではなく、在来文明自己保存の手段と考えてよい。

東洋の「近代」はかつて、社会のコンテクストを西洋流の近代国民国家に移し替えた。いまもう一度近代国家のコンテクストをアンチ・システム論のグローバリズムに移し替えると、日本における宗教的な経験が蘇ってくる。例えば、田尻祐一郎は富士講についてこう語っている。「伝統的な神話に権威づけられた天皇ならぬ、富士山を中心とし米（菩薩）を基軸とする新しい神話の「うつりはじめ」としての天子を日本の中心に位置付けた」（源了圓・玉縣博之編『国家と宗教——日本思想史論集』思文閣出版、一九九二年、三二六頁）。

民間宗教は国家神道と異なる理由で天皇を支えている。ここにわれわれは清朝体制に替わる日本発信のアジア秩序の新たな胎動を読み取ることができないだろうか。問題は権力による職業の独占なのか、それとも職業の由来を裏付ける民間宗教なのか（深谷克己『民間社会の天と神——江戸時代人の超越観念』第一章、啓文舎、二〇一五年参照）という力と理念レベルの問題である。これは最高権力たる天子像の転換——権原から法原に関わるパワーシフトの問題でもある。日本はその達成——政治と宗教との分離により、東アジア法文化圏における特別な貢献を成し遂げている。

植村和秀氏は、民間宗教信仰のレベルで、特に石原莞爾の『世界最終戦論』の宗教的由来を明らかにしている。植村氏は在来文明の存在理由を「文」ではなく、「武」で決着するという石原莞爾の『世界最終戦論』の立場を披露している。東亜の王道を守るための戦争史観は、山東曲阜に駐屯した日本軍がなぜ孔子廟、孟子廟を守り、礼拝をしたかの説明になる。林房雄が提起した東亜百年戦争史観には中国近代革命が始終存在している。廃藩置県から日清戦争、辛亥革命、北伐、満州事変、そして中国共産党による制覇という流れの根底にあるのは、システム論的な進歩史観である。満洲事件に

よる自治から建国への転換は主権による縄張り意識が形成されたのである。友と敵の分かれ目は日清戦争である。

水林彪氏の問題提起に応えるためにも日本をも含む東アジア文明という視点が必要である。水林氏はマルクスの用語を採用し、明治維新が社会（市民）と国家（公民）との二元性を作り出したと見ているが、実際に近代日本の「公民」は帝政中国の「公民」とは内的結合関係を持っている。日本的な公民の政治倫理を根拠付けたのは吉田松陰に由来する宗教に寛容な柳宗元の人役説（徂徠の「苦厄介」説）である。日本のグローバル性は東アジア文明と切り離しては語れない。中国近代革命の道徳的エネルギーは日本由来である。

全体の感想として、太平天国、尊皇攘夷運動、明治維新、近代中国革命、北伐、満州事変、日中戦争はウェイスタン・インパクトに対して、東アジアのアイデンティティを求める性格のものだといえよう。

（国際日本文化研究センター外国人研究員）

基礎領域研究「英文日本歴史研究書講読」を開講・担当して

牛村 圭

コミュニケーション英語隆盛のなかで

巷間にはネイティヴ・スピーカーによる「コミュニケーション英語」教授を掲げる外国語学校がかなりある。大学のカリキュラムでも、従来の Listening & Speaking に加え Comprehensive などと銘打った英語科目が目につく。喜ばしい現状と思う。うらやましくさえ感じる。顧みれば自分が大学の教養課程に学ぶ学部学生の折、ネイティヴ・スピーカーによる英語の授業をとりたくても、そういう先生はきわめて少数派だった。せいぜいできることはといえば、ラジオの英語会話番組をカセットテープに録音して繰り返し聴くことだった。それを思えば、隔世の感をおぼえる。

だが、その一方で気がかりなこともある。それは、大学の授業で訳読を中心に据えた英文精読のクラスがかなり減じてきていることに他ならない。高等学校でも、日本人教師にも日本語ではなく英語を使って英語を教授することが推奨さ



れ、訳読の授業はカリキュラムの主眼からすっかり外れている。その結果、英文の大意のみ解ればよい、細部にこだわることなく大量に読むことが肝要、というのが英語教育の現場での読解授業の主流と感じられる（奇妙なことに、世に難関とされる国立大学の入学試験では昔と変わらぬ英文和訳問題が出題されているのだが……）。

英文の流れをつかみ、要旨をざっと理解する、それで済む場面ならばそれでもよい。だが研究者は、自身が専攻する分野の英文を正確に読み取り、ときには原著を翻訳して広く世に紹介する責務をも負う。にもかかわらず、その根底となる訳読の訓練の機会は、現在の日本ではおそらく大学受験の学習を境にしてほぼ消えてしまっている。そのため独りよがりの解釈や看過できない誤訳の出現——氾濫とは言わないまでも——を招いているのではないだろうか。

### 史実の正反対を伝える専門家による訳文

これまで私が研究対象としてきた分野の一つである東京裁判（極東国際軍事裁判）関係の訳書に見つけた由々しき一例——書名や訳者名は伏す——をここに引いて、議論のきっかけとしてみたい。

〔原著〕 But the general line of agreement should have been discussed in chambers, with all the judges present. That was not done.

〔訳書〕 しかし、合意の基本線は全判事が出席して判事室で討議されました。これは決着しませんでした。

東京裁判では対日降伏文書に署名した一一か国から一名ずつ判事が任命され、その中の「多数派」七人（イギリス、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、中華民国、ソ連、フィリピンの各代表判事）が自分たちだけで重要なことを決めて行くという事態が生じた。これは、「多数派」ではないフランス代表判事アンリ・ベルナールが個別意見書で明かした「真相」である。この判事団の不仲、不統一は、今や東京裁判に関わるきわめて基本的史実、常識の一つになっている。だが右に掲げた訳文は、一人全員で討議されたことを伝えている。訳者は、東京裁判を研究テーマに掲げて長く研究してきた専門家。にもかかわらず、史実に反する訳文を臆することなく活字としていることから、この訳者の他の研究業績へも大いなる疑問を抱かざるを得なくなるように思えた。

《should have 過去分詞》という高校で学習する英文法の助動詞の知識を失念している（欠いている？）ためこの誤訳に至ったことは明白であろう。《should have 過去分詞》は《ought to have 過去分詞》とほぼ同義であると教わる。「…すべきだったのにしなかった」という意味である。ちなみに助動詞に完了形（have 過去分詞）が続くと、過去に起こったことに対して現在の時点からコメントを加えるような意味を持つ。他には《must have 過去分詞》「…だったにちがいない」、「《may have 過去分詞》「…だったかもしれない」、「《can not have 過去分詞》「…だったはずはない」、「《need not have 過去分詞》「…する必要はなかったのにしてしまっ」等がある。前掲の英文は、「しかし、合意の基本線は全判事が出席して判事室で討議すべきだったのです。が、そういうことは行なわれませんでした」と訳せば、東京裁判に関わる基本的史実の一つが正しく伝わる。

### 英文の構造を如何につかむか

右に掲げたのは、文法知識の欠如が生んだ誤訳の例と云ってよい。その一方、英文の構造を正確に把握できないため、正しい理解につながらない事例も多々ある。やや構造が難解

な英文に立ち至ったら、既習の英文法知識を適用しつつ、その文構造を正しく解きほぐすことが肝要。そういう訓練の場こそ、研究者の英文読解力の向上につながるはずと信じている。やや臆面もなく記すならば、その機会の提供を試みるのが、平成二九年度より私が担当者として開講している「基礎領域研究『英文日本歴史研究書講読』」である。初年度最初の教室では、次に掲げる英文の構造を、想像力（創造力）によってでっち上げるのではなく、理詰めで正しく把握した上で、自然な日本語に移し替える手ほどきをすることに専念した。

The man is the book; the book is the man. This undeniable truth, which I often repeat to myself, I claim to be as true of gardens as it is of books and their authors.

As a man is, so is his garden. He is a reflection of it, and it of him.

この拙稿にたまたま目を通された諸賢は、まずご自身で構造を考え訳文を作ったのち、以後をお読みくださるようお願いしたい。

第一文——The man is the book; the book is the man. ——

はSVCの構造が明瞭な一文ではあるが、「その人はその本である…」とか「人というものは本だ…」みたいなさまざま訳文が出てきそうに思う。しかし、続く文の冒頭で、「This undeniable truthとある以上、第一文はtruth「真実、真理」の具体的内容ということがわかるので、是非「人は本なり、本は人なり」と始めたい。「文は人なり」のバリエーションと解してよいだろう。

一方、構造がつかみにくいのは、This undeniable truth以下の一文。文頭に置かれた名詞の働きをするものが、その英文の主語となると考えるのが自然な発想なので、「この紛うことなき真理は」というようにひとまず主語と考えて、それに呼応する述語動詞を探してみる。which以下は関係代名詞に始まる修飾部分(形容詞節)ゆえ後回しにして、文の中心となる動詞(述語動詞)を探すと、予想に反してI claim to be...というようにまた別の主語候補である「が登場しているため戸惑う。ここで辞書にあたれば、動詞claimには、claim + O + to be「Oがうである」と主張する」という用法がある。以上をまとめるならば、文頭に置かれたThis undeniable truthは、この文の主語ではなく、claimの目的語であり、強調のために文頭に置かれている、ということになる。

主語と思ったものが実は目的語だったというこの発想の転換ができるかどうか。

次に気づくべきは、be true of「～に当てはまる」という表現にas...as～という同等比較がついている箇所。This undeniable truth is true of gardens. という文と、This undeniable truth is true of books and their authors. という文を念頭において、当てはまる度合いが同程度である、という主張がなされていることを見抜けばよい。「人は本なり、本は人なり」と同じように、「人は庭なり、庭は人なり」というのが筆者の主張であることが分かってくる。ここまで読めれば、最後まで読み解くことができる。

最終文にある省略がやや見抜きにくいかもしれないが、ともかく中心のテーマは「人は庭なり、庭は人なり」とおさえれば、He is a reflection of it, and it is a reflection of him. と読み取ることができよう——「人は本なり、本は人なり。この紛うことなき真理、それを私は頻繁に自らに繰り返すのだが、その真理が書き手とその書物に当てはまるのと同様に庭にも当てはまると申し上げたい。ある人が存在するのと同じように、その人の庭もまた存在する。人は自分の庭を映し出し、庭はその人を映し出すのである」。庭を見ればその庭の

持ち主の人となりがおおよそ分かる、という趣旨の英文だった。

### 一石三鳥を狙って——*Cambridge History of Japan*と素材

開講する訳読訓練の場を「英文日本歴史研究書講読」と命名したのは、英語圏の日本史研究者の論考を読解訓練の素材にしたいと考えたからだ。日本史を論じる論文ならば受講者には背景知識がある。日本語でかつて読んだあの史実か、というふうに興味は薄れないだろうし、誤読をしても説明を聴けば納得しやすいと考えた。そして、外国人研究者の視点で論じられるため、世界のなかの日本というコンテクストが常にある。一八五三年の浦賀で起きた事件は、「ペリーが来航した」のではなく、「アメリカ大統領フィルモアがペリーを日本に派遣した」と書かれる。こういう視点の新鮮さをも堪能してもらいたいとの願いをも込めた。

一方、外国人研究者といえども専門家が執筆した論考は、ときに細々とした日本史上の史実を叙述することも少なくない。その点、概論めいた文章なら訳読の素材にふさわしいだろう。さらに願わくは、よき英文であってほしい。冗長では

なく澄んで引き締まった文体、格調高く、英語を書くときのお手本ともなり得るもの、そういう英語論文が最良と考えた。

これに適う素材としてためらうことなく選んだのが、日本の二〇世紀を扱う諸論考を収めている *Cambridge History of Japan* 第六巻所収の、当該巻編者でもあるスタンフォード大学教授（刊行当時）Peter Duns 教授の手による “Introduction”——「序論」——である。英文を読み、英文で書くという経験がある方なら首肯いただけるかと思うが、Duns 教授の英文は達意の英語と確信する。叙述の仕方も素晴らしい、読んでいてこの部分の説明がほしいな、と思うと、続くパラグラフではその説明が簡にして要を得た形でなされている。さながら読み手であるこちらのところの内を見抜くような書きぶりが展開している。

一英語学習者に過ぎない日本語話者の自分にどれほど Duns 教授の英文の魅力を伝えることができるか自信はなかったが、この “Introduction” を素材として「英文日本歴史研究書講読」は船出した。受講者には各自訳文を作成して教室に臨むこと、ただし私が説明しているときは英文に目を向けることに専念し、自作の訳文の見直し作業は散会後に行なうこ

と、という提言をした。英文の構造を説明するさいには、英文に目を向けることが肝要だからである。

英語に限らず西洋近代語は名詞を前置詞で接続して成り立つことがきわめて多い。その名詞をひとつひとつ日本語の名詞に置き換えていって、**「○○の○○による○○すること」**式の機械的なぎこちない訳文が生まれる。教室では、背景にあるはずの動詞表現を想起して訳文を作成することの大切さを常に説き、その傍らで、仮定法とは何か、この<sup>二</sup>の用法は何か、といったことを Duns 教授の英文を素材にして教示することにも努めた。思うに、正しい英文読解には、動詞の**「個性」**に目を向けての構造把握に加え、仮定法、そして助動詞のさまざまな用法に習熟していることが必要なのであろう。同じような説明を繰り返すうちに、受講者諸氏の理解度が高まっていくさまが見受けられたのはたいへん嬉しく思えた。

第六卷「序論」も次第に経済史などやや専門的な内容となってきたため、参加の諸氏と相談のうえ二年目の三〇年度には一九世紀を扱う第五卷の「序論」を素材とすることとした。こちらは同巻編者のプリンストンの日本史家 **Marius Jansen** 教授の手による。正直に自分の好みを記すならば、

私自身は **Peter Duns** の *lucid* で *stylistic* な英文のファンである。だが、黒船、開国、明治維新という大きな流れがある一九世紀は内容として大いなる魅力を持つためか、受講者の評判は良い。さて、まもなく三年目を迎える。新規受講者も加わることが予想される今春、このまま **Jansen** 教授を使わせてもらうか、それとも素材を改めるか、悩ましい思いにとらわれている。

(国際日本文化研究センター教授)

第五三回国際研究集会「世界史のなかの明治／世界史にとっての明治」を実施して

瀧井 一博

昨年(二〇一八年)は明治改元から一五〇年目にあたる節目の年であった。その締めくくりの年末一二月に、一四カ国から四〇名以上の明治史の研究者が一堂に会した国際会議を開催することができた。日文研の国際研究集会予算のみならず、東芝国際財団、社会科学国際交流江草基金、上廣倫理財

団といった外部資金も獲得して本集会を開くことができた背景には、日文研という場において明治一五〇年を議論する国際シンポジウムを挙行することへの大きな社会的期待が込められていたものと推察される。新聞各紙の記者の傍聴もあり、なかには東京からはるばる来所されたところも二例あった。そのうち、産経新聞にはウェブ上で大きく取り上げてもらった。本集会が広く関心をよぶものだったことを示している。

明治一五〇年をテーマにするなどあまりに時局迎合的に響くかもしれない。ただ、そこには私なりの二重の意味での戦略があった。

まず第一に、金策である。年々予算が削減されるなかで、これまで当然のように海外から大勢の参加者を招聘して行われてきた伝統ある国際研究集会（以下、日文研用語に従い、国研集会）も、もはやかつてのような規模で開催することは不可能となっている。国研集会を開くならば、外部資金を獲得することは必須要件となりつつある。だとすると、世間的に通用する名目や意義が必要である。明治一五〇年というのは、研究プロジェクトの社会的意義を強調するに当たって、願ってもない符牒であった。この時を逃したら次はないとの

事業のタイムリーさを申請書のなかでアピールできた。その狙いが功を奏したのか、申請した外部資金はすべて採択だった。

因みに記すが、日文研に助成をしたいと思ってくれたファンドもけっこうあったのかもしれない。支援の請願に足を運んだある財団では、理事長室に通されたが、その本棚には梅原猛著作集が並んでいた。

第二の戦略とは、学術的なものである。当初、安倍首相が明治日本の顕彰に熱心であるとの報道が見られ、政府主導で大々的に記念事業が執り行われるのではないかと憶測された。内閣官房に設けられた「明治150年」関連施策推進室が、「明治の精神に学び、日本の強みを再認識することは、大変重要なこと」と謳っていたように、過度な明治礼賛が行われ、その果てに五〇年前の明治一〇〇年のような大がかりな国民動員がなされるのでは、と身構える向きが学界には多かったように思われる。

だが、蓋を開けてみると、政府による明治一五〇年の取り組みは決して充実したものではなかった。実施したことといえば、ロゴマークを作って、各省庁や自治体の関連事業の広報などで使用してもらったこと、それら事業の紹介や明治期

の写真資料を主たるコンテンツとするポータルサイトの開設、伊藤博文や山県有朋など元勲政治家の住まいが多くあった神奈川県大磯町における記念施設の建立といったものであった。

一〇月二三日には、憲政記念館で政府主催による記念式典が開かれたが、出席者は約三五〇名で会の内容もお座なりなものだったと聞く（写真1）。何よりも、そこに天皇の姿はなかった。五〇年前の同じ日に挙行された佐藤栄作政権による明治百年祭の記念式典は、日本武道館を会場とし、一万人もの来場者を得て大仰に開催された。天皇皇后も参加し、佐藤首相の音頭で他の参列者といっしょに万歳をしている写真が残っている（写真2）。両者の落差は歴然としている。

このように尻すぼみに終わった明治一五〇年の記念事業の前にして、これを機に権力批判を展開しようとしていた向きは、肩透かしだったのではないか。かく言う私も、国研集会の母体である共同研究会「明治日本の比較文明史的考察」を発足させた当時から、明治維新一五〇周年にあわせて、官民双方から明治への回帰を唱えるアナクロな風潮が高まるのではと予測し、それに対抗した学術的取り組みとしてこのような研究プロジェクトを組織した。ただ、それは、単に政府主



写真1 出典：首相官邸ホームページ ([http://www.kantei.go.jp/jp/98\\_abe/actions/201810/23meiji150.html](http://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/201810/23meiji150.html))



導の施策に対するリアクションであってはいらないとも考えていた。それでは、明治という歴史的体験を、しよせんは日



写真2 出典：総理府大臣官房『明治百年記念行事等記録』より

本国内だけの自閉的な語りに終始するという行いを共犯することにならないか。

そのように考えて、明治日本をお題に、日本研究が世界に向けて何を語れるかということを探ってみるのが、この国研集会に込めた企画者としての秘かな狙いだった。もとより定見があったわけではない。とにかく面白そうな人をかき集めて、一堂に会してもらおう。ワイガヤしてもらおう。そのなかから何らかのシナジーが起ることを期待する。本来シンポジウムとはそのようなものだったはずだ。余談だが、以前受け取ったドイツ語圏からのシンポジウムの招待メールには、「二番重要なことはプログラム上ではなく、コーヒープレークにある」と書かれていた。予算と引き換えのプロジェクトに追い回されているわれわれだが、そもそも学会会議とは、ふだんめったに会えない研究仲間が集い議論し交歓する貴重な機会であるべきだともあった。学問の世界を取り巻く状況はいずれも同じなのだなと思いつつ、プログラムの余白も（むしろそれこそ）大切だと意を強くして、アフター会議の懇親会にも心を砕いた。

この点で、外来研究員（日本学術振興会特別研究員）の西山由理花さんが公益財団法人京都文化交流コンベンション



ビュローを紹介してくれたのはありがたかった。この財団は、「京都 MICE」と称して、京都での国際会議の開催にあわせた京都の文化発信に努めており、懇親事業のための様々な助成も提供している。残念ながら申し込みの時期が遅く、すでに助成枠はいっぱいだったが、魅力あるパーティー会場のリストを提供してもらった。山県有朋の旧別邸として、また小川治兵衛の名庭で有名な無隣庵で懇親会ができると知り、食指が動いたが、一二月の京都にもかかわらず、家屋内の暖房は電気カーペット以外不可とのことで諦め、東京資本（井上章一先生の言葉で、「外資系」）に買い取られた鮎鶴にて最終日のフェアウェル・パーティーを行った。

肝心の中身のことも書いておこう。具体的な報告と討論の場では、明治期における日本人の海外での活動、明治維新が諸外国に与えたインパクト、公共性（公議）をキーワードとした明治維新の本質、喜劇や音楽を通じての明治日本の文化史的特性、地方行政や春画規制を通じての江戸期日本社会との連続と断絶といった観点から活発かつ緻密な討議が行われた。いくつかの例を挙げれば、一次史料の綿密な調査と読解を通じて日本の地域秩序の解明を試みたハーバード大学教授のデヴィッド・ハウエル氏とノースカロライナ大学准教授の

マレーン・エーラーズ氏の報告は、海外の日本史研究が史料的にも日本国内の研究と同じ水準で達成されていることを示すものとして注目を集めた。また、京都大学名誉教授の伊藤之雄氏による近代日本の形成に与えた君主制の寄与、そして東京大学名誉教授の北岡伸一氏（ICCA 理事長）による国際開発支援の観点からの明治維新の意義づけという二つの特別講演は、中東や東南アジアからの参加者に大きな印象を与えたようである。なお、会議では一部を除いて、日本語が専ら使用されたが、そのことによって、欧米のみならずアジアの広い地域からの研究者がわざわざ議論できたと好意的に評価する声があがったこともここで記しておきたい（リップサーヴィスかもしれないが）。

内容的には非常に濃密な三日間の会議だったが、課題も残った。多岐にわたった報告と議論を整理し、その成果を世に問う必要がある。できるならば本のかたちで出版したいが、寄せ集めの論文集ではなかなか引き受け手が見つからない。少なくとも、これからまたスポンサーを探すことはしなければならぬ。

最後にまた金の話に戻ってしまった。ついだから、もう一言記しておこう。冒頭で書いたように、国研集会を開催す

る予算状況には深刻なものである。限られた予算を有効に使うことはもちろんだが、せっかく来てくれたゲストへのホスピタリティがおろそかになってはならない。かつてのように予算が潤沢とはいえなくなったからこそ、わざわざ海外から招聘に応じてくれた研究者への礼を失することの無いようにしたいものである。招聘の段階で、その条件をきちんと説明しつつ、可能な限り先方の要望に弾力的に応じていく体制が不可欠だろう。日文研は共同利用機関であり、何よりも海外の日本研究の促進をミッションとしているのだから。

(国際日本文化研究センター教授)

## 汪暉氏と歩く被災地・被差別部落——新しい主体性の形成に向けて

磯 前 順 一

汪暉氏(清華大学人文学・社会科学高等学院所長)が現代中国を代表するポストコロナル世代の人文学者であることは広く認知されているところである。汪氏が二〇一九年一月

一六日から三一日まで京都の国際日本文化研究センターに滞在し、レクチャーやセミナーを行うとともに、筆者とともに所外活動を行った。以下は、その覚書である。

到着の翌日にあたる一月一七日に、私たちは震災の追悼セレモニーの開かれていた神戸市を訪問した。最初に訪れたのが多くの市民の集まる東遊園地。震災の起きた時間で止まった時計を抱えた海の女神像、東北地方から送られた雪で出来た地藏菩薩像、「二・一七」の文字をかたどった竹の灯籠などを見学した。竹灯籠では、一つの灯籠から別の灯籠へと火を移していく儀式に、人と人を繋ぐ共同性が構築される端緒を見た思いであったと汪氏は言った。最後に向かった記憶のモニュメント施設では、一面に湛えられた水面に花びらを共に浮かべ、祈り、犠牲になった方たちの名前の記された壁面に頭を垂れた。

東アジアにおいて「宗教」という言葉が西洋のキリスト教の意味合いを多分に含みこむものであることは、今日の宗教研究では国内外を問わず周知の事実である。では、「その影響を受けながらも、完全には回収されない余白を含む言葉にどのようなものがあるか」という質問を汪さんから受けた私は、「近代以前から存在する『信仰』という言葉が思い出さ



1月22日開催「所長主宰研究談話会」の後にて  
(写真左より、筆者、汪暉氏、小松所長、荒木副所長、安井教授、稲賀教授)

れる」と答えた。しかし、その影響が西洋か非西洋かという議論よりも、そうした要素があいまっていかなる主体を作り上げているのかを論じた方がより有効であろうという点で、私たちの見解は一致した。

次に、被害のもっとも甚大であった長田区に移動した。JRの駅前には広大な青色のビニールシートのうえに、ペットボトルで作った蝋燭台が「ながた」という文字を象っていた。人の集まりは東遊園地にくらべると、夕方のセレモニーだからであろうか、いまだまばらであった。その端には長田の特産である、なめし皮をもちいた和太鼓が並べられ、夕方のセレモニーで音が轟くのをいまかと待っているかのようにあった。

そこから皮革製品を作っていた町工場のあった地区に足を運んだ。地震が誘発した火災によって灰燼に帰したこの街は、震災から二〇年以上を経た今も復興のさなかにあった。否、正確に言えば、復興が途中で止まった状態にあった。かつての個人の零細経営を中心とした皮革産業ではなく、それを一極集中した経営に切り替えつつある。そして、乗り遅れた家々は、今も空き地になったままであった。良くも悪くも、震災が資本の一極集中化を推し進めたのである。

東遊園地では垣間見ることのできなかった、復興のもたらした影の部分を目の当たりにした汪氏は、次のような感想を語った。

「国民国家の外部、他国民との間にも搾取や排除の事態が立ち現われることはよく指摘されている。しかし、ここで見られるのは、おなじ国民国家の内部で周辺化されるマイノリティや被災者の問題だ。国民国家は外部に周縁を作るだけでなく、その内部に周縁を作り出す。人間が亡くなった後の追悼や記憶のありかたにも格差があることがよくわかるね。」

国民国家は、均質な国民の産出を欲しながらも、その内部のいたるところに余白を含みこんでいる。余白があるからこそ、それを抵抗の拠点とした社会構造の改革もまた可能になるわけだが、そうした余白の場所に割り当てられた人間は容易に社会の大勢を占めマジョリティからの差別の対象になりやすいことも事実であろう。翌日に催された日文研の公開レクチャーでは、汪氏は「世紀」という思考の始まり——初期二〇世紀中国における帝国主義、ナショナリズム、コスモポリタニズム」という講演を行った。

そこで議論されたのは、「世紀」という西洋キリスト教的

な時間観念が本格的に導入されたのは、中国においては二〇世紀が初めてであったこと。同時にこの時期になって、東アジアと西洋、アフリカ、南アジアなど横の地理的な同時性の空間や思考法が成立したこと。当初東アジアの知識人たちは、西洋近代を普遍と考え、自らの歴史的伝統を「特殊 (the particular)」と考えたわけであるが、それは西洋列強による植民地化の危機のもと、西洋のオリエンタリズム的な眼差し、すなわち西洋のみを「普遍 (the universal)」と考える見方を内面化した産物でもあった。

こうした西洋中心主義的な近代の捉えかたを汪氏は批判し、近代とは西洋だけが独占する単数の「modernity」ではなく、複数の「modernities」であること。それゆえ、「普遍」と「特殊」という対概念で捉えるのではなく、「普遍」と「単独 (the singular)」という組み合わせのもとに、その二重構造を考えるべきだと述べた。ここでいう「単独」とはそれぞれの地域に固有の歴史があるとする見解であり、〈西洋Ⅱ普遍／東洋Ⅱ特殊〉といった二項対立を脱臼させる働きを促す。ここでは、単独と組み合った「普遍」とは西洋に専有されたものではなく、固有の歴史をもつ各地域にみられる、他者へ開かれようとする働きを指すものとなる。

こうした理解は、タラル・アサドが唱える「複数の近代」あるいはガヤトリ・スピヴァクの唱える「複数の、他者なるアジア (other Asias)」とった概念に呼応する点で、西洋近代のヘゲモニーを脱構築するポストコロニアル研究者ならではの理解といえよう。ただし、汪氏の理解は単なる複数性や「多重性 (doubling)」を指摘するにとどまらず、単独性こそが普遍性に開かれた入り口をなすことを指摘した点で、ともすれば相対主義に陥りがちなポストコロニアル思想を、「非共約的なものの共約性 (commensurability of the incommensurable)」という意味での普遍的なコミュニケーションの場に推し進めたものと言えよう。

それゆえに、汪氏は通俗的なポストモダニストが声高に叫ぶ主体が要らないといった立場は取らない。むしろ、どのように政治的な次元において主体を構築するかという視点から、現在の中国社会では語ることがタブー視されがちな中国の文化大革命など、東アジアの歴史を読み直していく。

主体とはしばしば誤解されているように啓蒙主義的な西洋的個人を指すものとはかぎらない。集団や社会を単位としても、人びとは何がしかの主体を形成しようと試みており、その政治的次元を「主権者 (sovereign)」と呼ぶのである。グ

ラムシの言うところの、ヘゲモニーによって構成された「歴史的ブロック (historical block)」もまた政治的主体の典型的なものである。主権者とは言うまでもなく、公共空間における社会的権利を主張することを認められたものののだ。

こうした主体あるいは主権を形成し得ないとき、人間は排除されたり、あるいは社会的権威の一部に容易に取り込まれていく。こうした主体の構築は、すでにアルチュセールが指摘するように重層的になされており、例えば性的マイノリティがマジョリティに抑圧される社会的存在である一方で、ときに高学歴を修めることで恵まれた社会的地位に就いていることも珍しくはない。近代が複数性のもとに存在するように、主体もまたその内部に分裂や亀裂を抱えた非同質性を本質とするものなのだ。ただ、そうした自己の主体を走る亀裂に居心地の悪さを感じる人びとは、自分を一方的に、それがマイノリティであれマジョリティであれ、何かと同一化を図ることで自己の安心を得ようとするのである。

そんな議論を私と汪氏が本格的に行ったのは、二六日に阿倍野の四天王寺から、葦原橋にある被差別部落を訪問した時のことである。「毎年日本にきているけれど、これまで被差別部落を案内してくることはおろか、そうした地域が存在す

ることを教えてくれた人もいなかった。実際には存在しているけれど、見えない存在とされた地域が日本にも存在していることが実感できた」。そういつて汪氏は私に何度もお礼の言葉を述べてくれた。我々の会話は四天王寺のお堂の下に住んでいたとされるハンセン氏病者、さらに周辺の被差別部落の人たちが受けた苦しみには及んだ。そこで「主体ない人びとの共同体」を語る知識人たちの姿勢について話が及んだ。

汪氏の「政治化 (politicizing)」とは「政治的状况への参入」を意味するものであり、カール・シュミットの議会制民主主義批判を意識しつつも、その「敵／友」の二分法を脱臼させた上で提起されていた議論である。この点は、二九日に行われた有志における汪氏読書会で確認された。しかし、シュミットに与しないからと言って、汪氏がヒューマニズムをもろ手を挙げて支持することはない。

汪氏はそうした立場を取らず、ニーチェやマルクスやフロイト以降の「人間の死」と呼ばれるような、主体の存在形態を規定する社会構造そのものを問題とする。ただし、主体は構造に根ざして族生するものであり、主体が構造に自己反省的に介入することも可能である。そこにおいて、「政治的主体」を形成する契機が生じると汪氏は考える。もし、そうし

た主体の存在そのものを拒否するならば、人間という個物は社会構造に飲み込まれたままになるだろう。主体に対する「批判」は大切なことであるが、それが今日多くの識者が躓いているような、主体そのものの「否定」とは混同されてはならない。

以上のように、汪氏と私は被差別部落を歩きながら語りあった。そこから、「新しい主体化形態 (new form of subjectivity)」、歴史的ブロックの存在形態が模索されていくことになるのだ。事実、すでに現実の社会では、表勢力の有無を分岐点とする「知識人」と「民衆」という二項対立がすでに脱臼にされている事態が看取されるという。その実践の公共空間が神戸の東遊園地であり、長田駅前であり、各地の被災地の祭祀空間ということになる。この新しい主体化をめぐる汪氏と私の会話については、三〇日に行われた磯前による被災地における主体化をめぐる報告「Without You——あなたのない世界を生きて」にさいして討論された点であるが、それはまた別の機会に報告することにした。

(国際日本文化研究センター教授)

日文研 六十二号

二〇一九（平成三一）年三月三十一日発行

編集 倉本一宏、呉座勇一

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ファックス (〇七五) 三三五―二〇九一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社

